

# ピースワークショップ

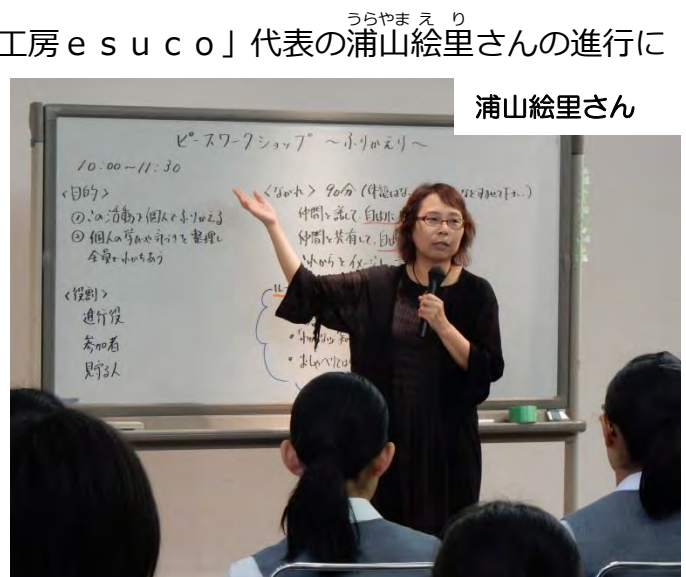
平成29年8月20日(日) 10:00~11:30

羽村市生涯学習センターゆとろぎ レセプションホール(参加者30人)



ピースワークショップは、「ひとづくり工房 e s u c o」代表の浦山絵里さん<sup>うらやま えり</sup>の進行により、ピースメッセンジャー事業で経験した貴重な体験を活かして、平和な社会に向かって、これからの私たちができることについて考える機会として実施しました。

まず、2人1組で、事業に参加した感想を共有するなど、これまでの事業の振り返りを行いました。その後、4人1組のグループに分かれ、「ピースメッセンジャーの活動は?」、「印象に残っていることは?」、





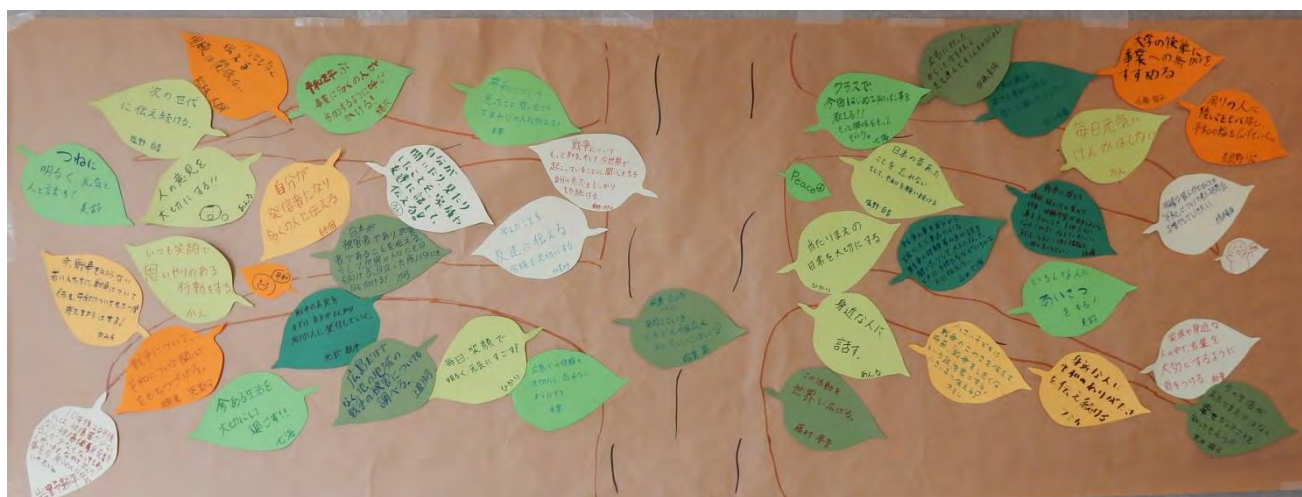
「これからどうしていきたい？ どうなりたい？」などの問いかけを相互に行い、グループ内での対話を重ねた後、『平和な未来に向けて私たちが出来ること』を考え、自分の言葉にしていきました。

最後に、参加者全員で葉の形をした用紙に『平和の想い』を書き、大きな『平和の木』を作成しました。完成した『平和の木』は、報告会等で発表しました。



参加者からは、次のような宣言がありました。

- 毎日、笑顔で明るく元気に過ごす。
- 日本に昔あった出来事を忘れない。そして、平和を願い続ける。
- 自分が聞いたり、見たりしたことを家族や友達に話して伝える。
- 当たり前の日常を、今ある生活を、大切にしている。
- 今の生活が当たり前ではなく、幸せであるということを知ってもらう。
- この活動を世界に広げる。
- 広島だけでなく、他の地域の戦争の被害について調べる。
- 身近な人に平和のありがたさを伝え続ける。
- いつも笑顔で、思いやりのある行動をする。
- 今、戦争を知らない若い人達に、戦争について伝え、平和についても一度考えてもらうようにする。
- 自分が発信者になり、多くの人に伝える。
- 平和を学ぶ事業に多くの人に参加するように呼びかける。
- 日々、健康で生活できていることに感謝して、今回広島で学んだことを友達など身近な人に伝えていく。



参加者全員で考えた『平和の木』



## 派遣報告会

平成29年8月20日（日）13:30～14:30

羽村市生涯学習センターゆとろぎ 小ホール（参加者152人）



羽村市生涯学習センターゆとろぎの小ホールを会場として、一連の事業を通じて体験したことや感じたことを発表する報告会を開催しました。会場には、主催者である青梅市長、羽村市長をはじめ、各校の校長先生などの学校関係者や青梅市・羽村市の市民など、計152人の方々にお集まりいただきました。中学生からの発表に熱心に耳を傾け、会場一体が『平和』について考える場となりました。

報告会における司会進行は、ピースメッセンジャーである、上原 沙弓さん（青梅霞台中3年）と、荒井 桜子さん（羽村二中3年）が務めました。

報告会は、時系列となるよう構成していて、はじめに、『原爆投下前の広島』、次に、『1945年8月6日8時15分』、『原爆の被害』、『広島その後』、『未来へのメッセー

ジ』として、報告した後に、午前中のワークショップで考えた『私たちにできること』を発表しました。

報告会の最後には、青梅市長、羽村市長から講評をいただきました。



また、報告会の後に開催された、羽村市の平和啓発事業である、西多摩地域での『戦争体験談語り』と『本の朗読会』にも参加し、地元、西多摩地域から見た『戦争』を知る機会となりました。



会場の様子



本の朗読会の様子



## グループ「Peace girl's」の発表

### ～原爆投下前の広島～

和田 美鈴（青梅一中2年）、浅井 初音（青梅七中3年）、星野 かすみ（青梅新町中2年）、  
山田 七海（羽村二中3年）、塩野 百音（羽村三中1年）



「原子爆弾が投下される前の広島には、美しい自然がありました。大好きな人の優しい笑顔、温もりがありました。一緒に創るはずだった未来がありました。広島には、当たり前前の日常があったのです。」

この言葉は、今年広島で行われた、平和記念式典で子ども代表の方が言った、平和への誓いの一部です。

1931年に満州事変から始まった戦争は、1937年に日中戦争へと拡大していきました。そのため、広島では、日清戦争の頃から多くの物資が作られ、港



からは多くの兵士が海外へ送られるなど、近くの『呉』とともに重要な軍都となっていきました。日中戦争になると、広島は軍事施設の新設や拡大が行われていきました。政府の命令により、工場で生産されるものは軍用品が中心となったため、市民の生活は苦しくなり、多くの市民が戦場や軍事工場などに動員されるようになりました。



1945年からは、日本各地にB29が来るようになり、頻繁に爆撃をされるようになっていきました。けれど、広島は空襲らしい空襲を受けていなく、「いつ大きい空襲が来るのか？」と住民の人々は不安がっていたそうです。中には、神社に行き「どうか命を助けてください」とお参りする人もいたそうです。

広島路面電車の車掌をしていた、<sup>ささぐちさとこ</sup>笹口里子さんのお話をします。

原爆が投下される2年前の1943年、当時20歳以上の男性は、お国のため徴兵に出されていたので、広島路面電車の運転手さんや車掌さんが足りなくなりました。そこで、運転手さんや車掌さんを育成するための家政女学校が創られました。<sup>ささぐち</sup>笹口さんは、運転手さんの仕事をしているお姉さんから、「仕事も学校も楽しい」という話を聞いて、<sup>ささぐち</sup>笹口さんも行きたくなったそうです。

そして、<sup>ささぐち</sup>笹口さんが14歳の時、100人ほどの同級生と一緒に女学校に入学しました。週に1度の休みには、お姉さんと一緒に映画を見に行ったり、『すみれ館』という写真館で写真を撮っていたそうです。当時を思うと、人の役に立てる電車に





関わる仕事が楽しくて、好きだったそうです。

これから、旧制広島県立第二中学校（以下、「旧制広島二中」）の2年生だった新出さん、<sup>にいで</sup>田渕さんから聞いたお話をします。

<sup>にいで</sup>新出さんは、海の方から「アメリカのスパイが見ているぞ！」と言われ、いつも家の雨戸のような<sup>よろしいた</sup>鎧板を取り付けていた扉を閉めていたそうです。また、夜になったら、光を漏らさないために電球の上の部分に黒い布をかぶせて、真下に光を照らすようにしていました。夜には、アメリカ軍の飛行機を探すためのサーチライトという照明装置が夜空で光っていたそうです。



新出稔雄さん

1年生の頃は、落ち着いて勉強ができていたのですが、戦況が厳しくなり、勉強の代わりに学徒動員として建物疎開という空襲による火災の延焼を防ぐために建物を取り壊す作業や、イモ畑となった練兵場の草むしりをしていました。また、アメリカ軍の本土攻撃から身を守るために、竹やり訓練も行われていました。

次は、<sup>たぶち</sup>田渕さんのお話です。

<sup>たぶち</sup>田渕さんは、学校の勉強と学徒動員で遊ぶ時間がなく、戦時中の楽しみについては、「あまりなかった」とお話されていました。戦争が激しくなると学校の授業も少なくなって、学徒動員の作業ばかりしていたそうですが、「その中で辛かったことは何か」とい



田渕廣和さん



う質問に対して、「あまり辛いと感じなかった。むしろ、お国のために役に立つことに恵まれていると思っていた」とお話されていました。また、「戦時中好きだった食べ物は」との質問に対しては、「イモ以外食べた記憶がない、2つ食べられればごちそう」と答えが返ってきました。当時の新聞には、特攻隊で亡くなった人の名前が記事になって載っていたそうです。特攻隊とは、爆弾をのせた飛行機で自らの命を犠牲にし、敵の目標に乗組員ごと体当たり攻撃をする、戦時中の日本の戦法です。海軍を目指していた<sup>たぶち</sup>田渕さんは、その記事を見ると「俺も！！」という特攻精神が芽生えたとも言っていました。

しかし、この話の後、<sup>たぶち</sup>田渕さんは、「当時は、天皇陛下のお言葉が大きく、お国のために軍隊に行くことが良いことだと信じていたが、今は戦うための軍隊など、ない方が良い」とお話されて、その言葉がとても強く心に残っています。

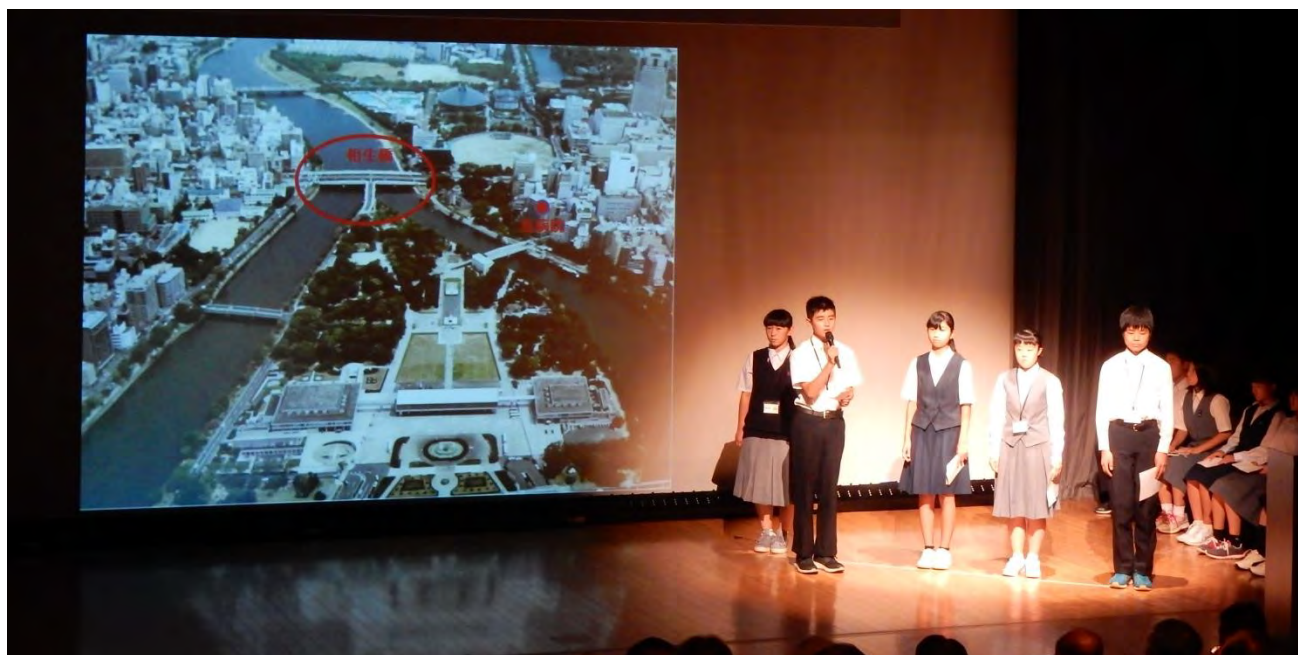
8月6日の午前8時15分、その時、先生の集合の掛け声で集まっていた2年生の頭上に飛んでいたB29から、何かが落とされたのを、皆で見っていたそうです。



## グループ「たこ焼き♪♪」の発表

～1945年8月6日 8時15分～

折内 瑠渚(青梅六中2年)、師岡 倫聖(青梅吹上中3年)、光武 航平(羽村一中2年)、  
石野 史華(羽村二中3年)、中山 彩嘉(羽村三中1年)



8月6日の午前1時45分。原子爆弾『リトルボーイ』を積んだアメリカ爆撃機『エノラゲイ号』と偵察機は、マリアナ諸島、テニアン島から飛び立ちました。

2機は広島の上空を飛んでいました。8月6日の広島は雲一つない快晴だったので、2機の飛行機をすぐ見つけることができました。広島の人々は、飛んでいる2機をいつもの偵察機だと思い、あまり警戒していなかったため、警報は鳴りませんでした。

午前8時15分、偵察機だと思っていた機体からキラキラ光る物体が落とされました。

落とされた物体は、米軍の新兵器である原子爆弾で、標的は相生橋。相生橋は、軍都としての広島を効率よく破壊するために選ばれた広島あいおいぼしの中心でしたが、原子爆弾は標的を外れ、相生橋あいおいぼしから数百メートル離れた、島病院の上空600メートル地点で、午前8時15分に炸裂しました。その瞬間、青白い光と共に、熱線、放射線、爆風が発生しました。発生した熱は、2000度から4000度で、超高压となった空気は、爆風となりました。そして、広島あいおいぼしの街を一瞬にして壊滅し、人々の心と体に深い爪痕を残したのです。



これから、実際に被爆した3人の方の体験談をお話します。

まず、路面電車の車掌をしていた<sup>ささぐちさとこ</sup>笹口里子さんのお話です。<sup>ささぐち</sup>笹口さんが体験した午前8時

15分は、一瞬ピカッと青白い光が見えました。しばらく、気絶してから、腰が痛くて目を覚ますと、瓦礫の下敷きになっていたそうです。

<sup>ささぐち</sup>笹口さんの8月6日の午前8時

15分は、仕事が午後番に変わったため、箸箱を持ち、食堂に行き、朝ご飯を食べ始めるところだったそうです。

<sup>ささぐち</sup>笹口さんは、当時女学校の1年生で、勉強をしながら広島市内を走る路面電車の車掌をしていました。暇を見つけては勉強をするといった生活で、毎日仕事ばかりだったけど、電車が好きだったため、車掌としての乗務は苦痛ではなかったと言っていました。しかし、1発の原子爆弾で、昨日まで普通に過ごしていた日々が、一瞬にして失われてしまったのです。

次に、当時旧制広島二中の2年生だった<sup>にいで</sup>新出さんと<sup>あさの</sup>浅野さんの2人の体験談を紹介します。

<sup>にいで</sup>新出さんは、8月6日の午前8時15分、広島(広島)の空は雲一つない青空で真夏の太陽がカンカン照りの中、2機の飛行機が飛んでいるのを見ました。飛行機は、山の方から海の方へゆうゆうと飛んでいました。すると、何か落ちてくる、と感じる間もなく激しい閃光とともに、辺りが一瞬にして真っ黒になりました。何も見えず、熱風で息が出来なくなるほど苦しい状態が続いたので、この時、死を間近に感じたそ

笹口里子さん



新出稔雄さん



うです。

広島には、軍があるのに空襲がないのはおかしいと人々が不安に思っていた頃、8月6日はやってきました。当時、旧制広島二中の2年生は、建物疎開や畑仕事を行っており、勉強する時間はほとんどありませんでした。

8月6日は、爆心地から2キロメートルほど離れた場所（東練兵場）で畑仕事をしていました。そこで、被爆しました。

その時、<sup>あさの</sup>浅野さんは、船の上にいました。

その日、学校を休んで、食料を仕入れるためにお母さんの実家へ船で向かっていましたが、いつもと変わらない平和な広島市内の町並みが見えていました。静かな時間が流れていると、遠くの方から2機の飛行機が飛んできて、するとピカッとピンク色に光るものが広島市内に落ちていくものが見えました。

午前8時15分、その瞬間、太陽よりもまぶしい光が辺りを包み、目をつぶっていても眩しい光だったと言っていました。光が収まり、あたりを見回すと、見たことのない大きな雲が空高く上がっているのを見ました。そして、その雲の周りに、取り巻くようにして、積乱雲ができていました。それが『きのこ雲』です。あの雲の下で、広島市内がどのような状態になっているのか、何が起きているのか、まだ全然分かりませんでした。これが、それぞれ体験者の方々の午前8時15分でした。



浅野温生さん



## グループ「katsudon」の発表

### ～原爆の被害～

石田 光（青梅二中2年）、木村 純麗（青梅七中3年）、遠藤 滯（青梅泉中2年）、  
岩野 耕平（羽村一中2年）、山内 杏流（羽村三中2年）



これから原爆による爆風・熱線・放射線の3つの被害を説明します。

まず、爆風による被害です。

広島県産業奨励館は、原爆の投下による音速を超える秒速440メートル以上の爆風で、無残に壊れ、瓦礫やレンガが散らばる今の姿になりました。爆心地からわずか150メートルと、通常の建物なら全壊・全焼の地点にありながら、骨組みだけ残ったこの産業奨励館は、『平和のシンボル』である『原爆ドーム』として残っています。



次に、旧広島陸軍被服支廠<sup>ししやう</sup>の被害です。

被服支廠<sup>ししやう</sup>は爆心地から約2.7キロメートルも離れていながら、爆風だけで鉄扉が内側に曲がっていました。この曲がった鉄扉は、被害の大きさを今も語り続けています。被服支廠<sup>ししやう</sup>は火災や倒壊はしなかったため、臨時救護所となり、そこで、被爆した多くの人が亡くなりました。





次に、広島市郷土資料館です。元の名は、「<sup>うじな</sup>宇品<sup>りょうまつしやう</sup>陸軍糧秣支廠<sup>いづみ</sup>缶詰工場」で、牛肉缶詰を製造していました。爆心地から約3.2キロメートルも離れている缶詰工場の鉄骨は、爆風で折れ曲がり、今も郷土資料館に異様な姿をとどめています。

爆風が投下されると、爆心地の温度は、約4000度まで上昇し、人は一瞬にして蒸発し、影が焼き付いて黒く残るほどでした。そんな強烈な熱線による人体への被害は、計り知れないものでした。

人々は、髪は焼け縮れ<sup>ちぢ</sup>、性別が分からないくらいに真っ黒に焦げて、皮膚が垂れ下がり、幽霊のように手を挙げて水を求めてさまよう姿に変わり果ててしまいました。火傷した人々は、早く弱ってしまうので、水を与えてはいけないと言われていたので、どれだけ水を欲しがっても、水は与えられませんでした。



広島市郷土博物館 爆風で折れた鉄骨

さらに熱線は、物への被害も凄まじかったものでした。瓦は溶けて表面がブツブツの泡状になり、ガラス瓶もまるでゴムのような感触になってしまいました。このように、熱線は、人々だけでなく、今後の生活に関わるものにも大きな被害をもたらしました。

次に、放射線による被害についてお話します。放射線は、目に見えず、体の中の細胞を破壊していきます。そのため、外傷がまったくなく、無傷と思われていた人たちも、被爆後月日が経過してから、白血病などの病気を発症し、亡くなってしまった例も多くあります。また、親族を探していたり、救護活動のために市内に入った人たちの中には、放射線が残っていると知らず、<sup>にゆうしひばく</sup>入市被爆をして同じように発病したり、亡くなったりする人もいました。

被爆者の<sup>やまもと</sup>山本さんについて話します。<sup>やまもと</sup>山本さんは、旧制広島二中の2年生でした。朝、B29が広島の上空に飛んできましたが、空襲ではなかったので安心していたら、光とともに

大きな音が鳴り、気を失ってしまいました。気が付いてみると、駅の向こう側にピンク色のキラキラした『きのこ雲』がありました。山本<sup>やまもと</sup>さんは、体の左側から爆風を受けたので、体の左半身を火傷していました。安全を確保するため、急いで山の中の寺へ行きました。山の中の町を一望できる場所から町を見ると、そこには今までの活気のある町はなく、静かで灰色の町がありました。爆風により、町が一瞬で消えてしまったのです。家に帰ると、家は全壊だったものの、家族は全員無事でしたが、爆心地の近くで建物疎開作業をしていた旧制広島二中の1年生は全滅してしまいました。



山本定男さん

広電の車掌をしていた笹口<sup>ささぐち</sup>さんの話をします。この地図は、家政女学校の位置を示したものです。笹口<sup>ささぐち</sup>さんの証言によると、気が付くと建物は崩れ、薄暗く、校庭に集まると怪我を負った友人が泣いていました。列を作って橋を渡ると、火傷により顔が腫れた人が川にビッシリ浮かんでいました。防空頭巾を持って宇品<sup>うじな</sup>の方に逃げると、ものすごい火傷を負った変わり果てた人を見ました。また、電線はプスプスと音を立て、家は焼け落ち、広島<sup>ひろしま</sup>の街は一瞬にして変わり果てていました。

その後、家政女学院の姉妹校である実践女学院で再会したお姉さんと髪を梳きあうと、髪がごそっと抜けてしまいました。



笹口さんの避難経路の解説（中澤さん）



## グループ「赤べこ」の発表

### ～広島その後～

吉田 佳暖（青梅一中2年）、稲葉 葵（青梅三中1年）、藤村 夢音（青梅西中3年）、  
古川 佳愛（羽村一中2年）、織田 未夢（羽村二中3年）



私たちは、旧制広島二中の2年生だった<sup>たぶち</sup>田渕さんと<sup>こばた</sup>小畑さんの証言を聞きました。

<sup>たぶち</sup>田渕さんの友達である1年生の<sup>やましためいじ</sup>山下明治君は、爆心地に近い本川土手で被爆し、原爆投下から3日目の9日の明け方、お母さんが「私も一緒に逝くからね」と言った時、<sup>やました</sup>山下君は、「お母さんに会えたから、後からでいいよ」と言ったそうです。

<sup>こばた</sup>小畑さんの友達である1年生の<sup>こせんひろゆき</sup>故選浩行くんは、飛んできた木やレンガに埋まっていましたが、そこからはい出た後に、目が見えなくなり、居合わせた隣の家の人に担架で家ま

田渕廣和さん



で運んでもらいました。家に帰った後、友人である小畑<sup>こばた</sup>さんがお見舞いに行くと、小畑<sup>こばた</sup>さんが帰る時に、はっきりと「サヨナラ」と言った後、故選<sup>こせん</sup>くんは亡くなってしまいました。今でも、旧制広島二中の1年生、322名のうち、167名の生徒のあの日の記録が残っていません。



小畑彰三さん

佐々木禎子<sup>ささきさだこ</sup>さんは2歳の時に被爆し、10年経った11歳の秋に白血病を発病しました。禎子<sup>さだこ</sup>さんは、『千羽折ったら病気が治る』事を信じて、薬が包まれていた紙で折り鶴を折り続けましたが、8か月の闘病生活の末に12歳で亡くなりました。そして、彼女の死をきっかけにして、同級生が中心となって、原爆で亡くなった多くの子どもたちのために、全国3,000以上の学校からの募金と海外からの寄付によって、慰霊と平和を象徴する「原爆の子の像」が造られました。現在、日本だけでなく、世界中から広島へ送られた千羽鶴はハガキに再生され、障害者の自立支援のサポート事業にも繋がっています。また、2017年（平成29年）8月6日には、アメリカのユタ州に禎子<sup>さだこ</sup>さんが作った折り鶴が送られています。なお、慰霊碑の碑文にはこのように書かれていました。

「これは僕らの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和を築くための。」

原爆の子の像





これは、平和公園内にある原爆供養塔です。この供養塔を基に、平和記念公園が造られました。現在、原爆供養塔には、一家全滅で身内の見つからない遺骨、氏名の判明しない遺骨、約7万柱が納められているとされています。その内、氏名が判明しながらも引き取られていない遺骨は、814柱にものぼります。広島市は、1968年（昭和43年）7月から『原爆供養塔納骨名簿』を公開し、今も全国の市町村および広島市内の公共施設等に名簿を掲示しています。供養塔の中に納められている人の『戦争』は、本当の意味でまだ終わっていないのです。



原爆供養塔

奇跡的に生き残った人々にも辛く、苦しい現実  
が突き付けられました。『被爆者』というだけで、  
酷い差別を受けたのです。例えば、被爆手帳を持  
っていることが分かった途端、縁談を断られたり、  
離婚させられた人もいたといいます。



また、ケロイドは、伝染するという偏見があったため、真夏でも長袖でいなければならなかったそうです。

沼田スズ子<sup>ぬまた すこ</sup>さんは、戦争によって生きる希望を失いかけてましたが、原爆砂漠といわれた地に力強く芽を出したアオギリの生命力に生きる希望を再び取り戻しました。



被爆したアオギリ

広島名物のお好み焼きは、当時の広島の人々の工夫によって生まれたものです。戦後の復興が進み、物資が不足する時代、食糧難が問題でした。アメリカ軍が支給してくれた小麦粉を使って、魚や野菜等を加えてお好み焼きを作っていました。現在の広島風お好み焼きの形になったのは、戦争直後、お好み焼きを販売するにあたって、以前入っていたネギに比べて、安くてボリュームのあるキャベツが使われるようになりました。そして、広島のお好み焼き屋さんの店名で良く見る『よっちゃん』や『みっちゃん』という『〇〇ちゃん』は、戦死した夫の名前や女手一つで頑張った店主の名前が多く用いられています。



被爆後わずか3日で、一部区画を走った路面電車。『生き抜こうとする力』これが現在の広島のシンボルとして残っています。



被爆電車 (651号)



原爆投下後、<sup>ささぐちさとこ</sup>笹口里子さんが見た風景は、手の甲が腫れた人、火傷をして顔がパンパンな人、川の中には体がぶくぶく膨れた方が大勢いたそうです。しかし、原爆が投下されて3日後、<sup>こい</sup>己斐から<sup>にしてんまちよう</sup>西天満町区間の約1.2キロメートルで、路面電車が復旧し、<sup>ささぐち</sup>笹口さんはその電車の車掌をしました。原爆投下後の数年間、電車賃は無料だったそうです。

現在走っている被爆電車は、「651号」、「652号」、「653号」の3両です。私たちは、<sup>ささぐち</sup>笹口さんの話を聞いて、広島電鉄株式会社の本社に行きました。地元の人もめったに見ることのできない被爆電車を、私たちのグループは3両すべて見ることができました。

この写真は、広島電鉄株式会社で働いていて、被爆された方々の慰霊碑です。

そこで偶然、72年前に被爆した

<sup>さくま</sup>佐久間徳彦さんと出会いました。佐久間さんは、当時14歳で車両修繕をしていて、被爆した路面車両も直したそうです。放射線の影響で、「草木も生えないだろう」といわれていた広島で、原爆投下から3日後に、なんと電車の運転が再開しました。この復旧した電車は、広島で生まれ、広島で生活する人々の、前の広島に戻れない絶望から、『ここで生きていくための力』を象徴したものです。

広島電鉄株式会社慰霊碑



被爆電車は「現在も広島の復興の象徴でもあり、広島の誇りとしての象徴でもある」とバスガイドの<sup>まつだ</sup>松田さんは言っていました。



バスガイドの松田さん

## グループ「それゆけ！田舎者」の発表

～未来へのメッセージ～

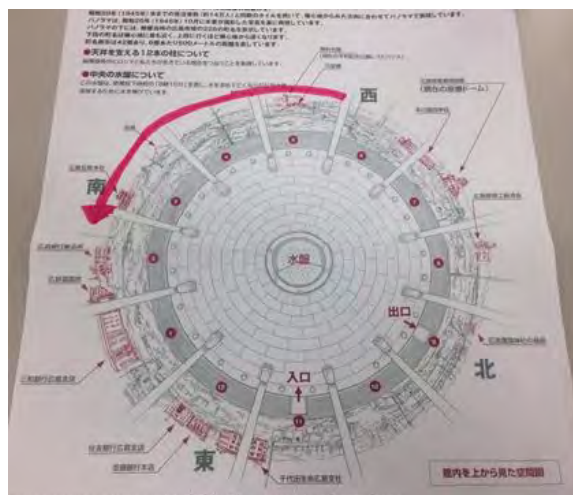
上原 沙弓（青梅霞台中3年）、庄司 結衣（青梅新町中2年）、梅林 ゆきの（羽村一中2年）、  
荒井 桜子（羽村二中3年）、佐藤 七海（羽村三中2年）



みなさんは、『平和』について、深く考えたことはありますか。

これから私たちの発表を聞いて、改めて考えてみてください。きっと、今とは違う『平和』の形が見えると思います。私たちは、広島での3日間を通して、当時の状況や人々の想いを知ることができました。

私たちは、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に行きました。館内は、反時計回りに進むようになっています。時間をさかのぼっていることを表しています。平和記念死没者追悼空間の壁には、爆心地付近から見た被爆後の街の様子がパノラマで描かれていて、中央には、原爆投下時刻の午前8時15分をイメージしている水盤があります。これは、水を求めて亡くなった方々を追悼するために水を捧げています。中央から壁のパノラ





マを見ると、72年前の絶望に包まれた空気を感じ、自分が孤独に見えてくるなど、感情移入してしまいました。



広島原爆死没者追悼平和祈念館

多くの被害を受けた建物、人、植物について、広島平和祈念資料館を通して説明します。まずは、今と昔での違いについて比較していきましょう。この写真は、当時の中学1年生の背丈と国民服の様子を表しています。当時の中学1年生の身長は、130センチメートルほどで、現在の中学1年生男子の平均身長156センチメートルと比較すると、明らかに小さく感じられます。このことから、あまり食べ物がなく、栄養不足だったことが読み取れます。



当時の国民服

この展示物は、国民服の様子について説明されていますが、このように目立った部分だけを取り出すのではなく、展示物全体を見ることで新たな発見に気付くことができます。他にも、被爆した人の体の被害写真や、軍服や洋服などの破れた痕や血の痕から、当時の様子などを読み取ることができます。

現在、広島では、平和への取組みが盛んに行われています。その例として、折り鶴の展示や、原爆ドームの保存、オバマ前アメリカ大統領の訪問などが挙げられます。私たちは、日本国民である限り、広島での被害が目立ってしまい、日本は被害者であるという目線になってしまいます。しかし、この戦争では、日本も加害者であり、日本によって被害を受けた国も当然あります。目立ったところに目を向けてしまうのではなく、少し目線を変えて全体を見ることで、当時や現在の世界関係が見えてくることと思います。それと同時に、被害者であり、そして加害者であることを認識することが大切です。

私は、被爆者たちの方と握手した時に、『重く深い物』を手に入れることができたと思います。生意気ではありますが、私は被爆者の気持ちを受け継いだ第二の語り部であると言っても過言ではないと思います。そして、それを伝える使命が私たちにはあると強く感じました。



被服支廠<sup>ししょう</sup>では、軍服などの製造・修理・保管などを行う建物で、内部には、保育所や病院もあったそうです。被爆直後は、建物が丈夫で倒壊しなかったため、救護所となりました。

被服支廠<sup>ししょう</sup>では、作家の中澤晶子<sup>なかざわしょうこ</sup>さんに、峠三吉<sup>とうげさんきち</sup>の

中澤晶子さん





「倉庫の記録」を読んでいただきました。

これは原爆の被害を受けた直後からの被服支廠<sup>ししょう</sup>の様子を表した詩です。

『「おじさん、ミズ！ミズをくんできて！」多くの少女は叫び疲れ恨めし気に声をおとし、その子もやがて、柱の陰に崩折れる。灯のない倉庫は遠く燃え続ける街の響きを地につたわせ、衰えては高まる狂気をこめて、夜の闇にのまれてゆく。』

これを聞いていると、タイムスリップしたような気持ちになりました。そして、二度とこのようなことがあってはならないと思いました。



被服支廠の内部

袋町小学校は現在、資料館として保存・開放しています。階段の横の壁には、被爆した人々の安否を知らせるための伝言がたくさん書かれていました。大きな被害を受けた中、必死に生きよう、生きて会おうという気持ちが伝わってきました。



袋町小学校の見学の様子

この2つの建物を見て、当時の方々が生きるために一生懸命だったことが分かりました。当たり前だと思っていることを大切にしようと思いました。また、被爆建物が持つその場の空気というものを感じ、自ら体験することの大切さが分かりました。



次に、平和記念公園についてです。緑で囲まれた公園内には、資料館や慰霊碑、当時のまま残っている建物等があります。



平和記念公園



これは、韓国人犠牲者慰霊碑です。戦時中の労働力不足を補うため、多くの朝鮮人が日本で働かされていました。被害に遭ったのは、日本人だけではなくたのです。



慰霊碑の解説(中澤さん)

私たちは、爆心地・島病院から原爆ドームがどのくらい離れているのかを体感するため、爆心地の島病院へ行きました。ふと空を見上げて私は、この綺麗な青空から落とされた一つの原子爆弾が広島の人々を苦しめたと思うと、とても悲しくなりました。

次に、被爆体験者のお話についてです。

<sup>ささぐちさとこ</sup> 笹口里子さんは、路面電車の車掌をしていました。路面電車は、原爆が落とされた3日後に短い距離ですが、再び走り始めました。これは広島の人々に大きな希望を与え復興の象徴となりました。<sup>ささぐち</sup> 笹口さんが考える平和とは「戦争がなく、世界中の人が仲良くできること」だと言っていました。

旧制広島二中の<sup>やまもと</sup>山本さんは、「昔、日本にあった悲劇を知り、その事をちゃんと未来へ伝えていって欲しい」と言っていました。

<sup>あさの</sup>浅野さんは、「平和の尊さに気付いて、大事にしていって欲しい」と言っていました。

私は、この3名の方から話を聞いて、誰もが悲しむことがこの日本に起こっていたということを改めて知りました。今、被爆者の平均年齢が81.4歳となっています。その中でこのように貴重な話を聞くことができたことに感謝したいです。だから、私は、戦争の悲惨さや話しを聞いた3名の方が伝えたかったことを、『私たちが未来へ伝えていきたい』と思いました。



山本定男さん



浅野温生さん

さらに、私たちのグループは、広島県立広島第一高等女学校の生徒だった<sup>かじやま</sup>梶山さんという方からお話を聞くことができました。

<sup>かじやま</sup>梶山さんは、当時、中学1年生で、原爆が落ちる日の前に盲腸を患っていたため、学校には行かず自宅で休養していました。8月6日の当日、<sup>かじやま</sup>梶山さん以外の1年生223人は全員亡くなったと聞きました。



梶山さん



「周りの友人は皆亡くなったのに、自分だけ生き残ってしまった。亡くなった皆に申し訳ない」と言っていました。「生きていることに対して『申し訳ない』と思っている人がいる」ということを初めて聞いた時、不思議であり、納得できませんでしたが、この3日間の体験を通して、少しずつ理解できるようになりました。

また、私たちの班は、平和記念公園内にある『被爆したアオギリ』を見に行きました。そのアオギリは、もともと役所（郵便・通信を行っていた<sup>ていしん</sup>逡信局）に立っていた木でした。人々とともに被爆し、傷を負ったアオギリは、枯れてしまったと思われていましたが、翌年の春、新しい芽を出しました。全身火傷で足を切断した沼田<sup>ぬまた</sup>スズ子<sup>こ</sup>さんは、自殺を考えていましたが、『二度と草木の生えることは無いだろう』と思われていた広島<sup>ひろしま</sup>の地に生まれた新しい芽を見て、生きる希望を取り戻したのです。こうして生き延びたアオギリは、今も平和記念公園で、生きる希望を語りかけています。

そして、その種が育ち、現在では「被爆アオギリ二世」として、多くの学校などに配られています。それは、青梅市役所にも植えられていて、私たちも広島の希望を受け継いでいるのです。



被爆アオギリ二世（青梅市役所）

8月6日の平和記念式典では、子ども代表の2人が平和への誓いをしていました。「広島は平和を考える場所であり、平和を誓う場所である」そう言っていた小学生の言葉が、私たちの心に響きました。会場の雰囲気から、戦争をしっかりと受け止め、向き合おうとしている多くの人々の姿勢が伝わりました。私たちは、戦争を体験したわけではありません。それでも戦争という事実を知り、それについて考えることができます。自分なりの想いを込め、周りに伝えることもできます。

最後に、平和記念公園のほぼ中央にある平和の灯。この灯は、世界から核兵器がなくなるまで燃え続けます。もう一つの被爆地の長崎市長も言っていたように、核兵器を持つ国、核で守られている国が勇氣ある決断をし、この灯が一日でも早く消えることを強く願います。そして、私たちは戦争に反対し続けます。反対することを恐れない。私たちは「NO」と言い続けます。



平和の灯

『核兵器禁止条約』が生まれた今、私たちはここで止まってはいけません。歩みを進めなければならないのです。歩みを進めるためには、戦争を知り、関心を持ち、戦争につながる芽を摘み取ること。そして、過去から決して逃げないことを、日本に、世界に求めます。



平和記念式典で飛び立った鳩





### 3 平和を願う作文（中学生）・

#### 事業を振り返って（大学生リーダー）







## 「平和の実現のために」

青梅市立第一中学校 2年 吉田 佳暖

広島での3日間で実際に見て聞いて感じた経験は本当に貴重で、戦争とは何だったのか、本当の平和とは何かを考えるにあたって私の価値観をがらりと変えるものだった。

8月4日。到着した新幹線から降りると一瞬で汗が吹きだすほど蒸し暑い熱気に包まれた。広島市は栄えていて活気ある明るい街だった。「72年前、この街で本当に原爆が落とされたのだろうか？」信じられない思いと共に、何とも言えない緊張を覚えた。

初日と2日目に、被爆者の体験談を聞かせていただいた。どの方も真剣な眼差しで語って下さった。恐ろしく辛い過去を抱え、これまでの胸中はどうほどだったのだろうか。私と同年代の人々が、今では到底考えられない生活を送っていたこと、「お国のため」と学校に行きながら働いていたことに驚き、今の私達に当たり前のようにある毎日が、実はどんなに大切にかけがえのないものなのかを痛感した。

8月6日の広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式にも参列させていただいた。朝から太陽が照りつける雲一つない晴天だった。死没者名簿が奉納された。「今年新たに5,530名が加えられ、昨年までとあわせ308,725名となります」というアナウンスを聞いた瞬間、「ああ」と、心臓がずしんと重くなった。事前に学んでいても、この地で改めて聞く衝撃は大きかった。72年前も同じような晴天で、みんながいつもと同じ朝を迎えていたのであろう。たった一発の原子爆弾がその日常を奪ったのだ。

長崎・広島の前爆から72年が経った。いま世界には約15,000発の核弾頭が存在し、それぞれが保有する「核の抑止力」で均衡が保たれているように思う。しかし、これが本当の平和と言えるのだろうか。今も紛争の犠牲になっている子供がいる。友達や家族を亡くして絶望する人がいる。食べるものがなくて死んでいく人がいる。

平和とは戦争をせず、互いの個性を理解し許し合える世界であること。そして人々が何気ない普通の日常を生きられるということではないだろうか。その実現のために現代に生きる私達にはできることがある。それは「伝えていく」ということ。核兵器がどれだけ惨たらしく悲しい結果をもたらしたのか、資料では知り得ない広島や長崎の真実を全世界の人々に知ってもらい、もう一度原点に立ち返って一緒に考えていけたらきっと未来は変わる。私はそのために、自分が実際に見て学んだこと、そして今後も伝えていくことを、まずは友達や家族、そして将来の子どもたちにしっかりと伝えていきたい。



## 「争いのない世界」

青梅市立第一中学校 2年 和田 美鈴

私は広島原爆資料館に一度だけ行ったことがあります。そのときはまだ幼く、ただただ怖いとしか思いませんでした。しかし今になってもう一度行けば平和について分かるのではないかと思い、ピースメッセンジャーに参加しました。

広島に行って、戦争を経験した方と実際にお会いしてお話を聞いてきました。

当時14才だった笹口里子さんは、女学院に通いながらチンチン電車の車掌さんをしていました。8月6日の朝は、ちょうど食事をとろうと食堂に向かう途中で原爆が落ち、被害にあったそうです。その当時、戦争は「お国のためにしていること」と思っていたそうで特になんとも思わなかったそうです。しかし今、戦争のことを思うと「良いことは一つもなかった。」と言っていました。

笹口さんが願う平和を聞いてみました。最近、いじめや自殺のニュースが多く心が苦しくなるそうです。希望をもって明るくいてほしい、そして「皆が仲良くなるような世界」になることを願っていました。

新出稔雄さんは、旧制広島県立第二中学校の2年生でした。学校が楽しかったものの戦争が激しくなり、ほとんど勉強はできず戦争のお手伝いをしていました。8月6日の朝は、練兵場の草むしりをしていて集合の合図がかかったとき、強い光を見たそうです。一年生は、原爆が落とされたすぐそばで建物疎開を行っていたため、322人が犠牲になりました。中学生だった新出さんは、何もできることがなく胸が苦しかったそうです。

新出さんが思う平和を聞いてみたところ、「心の中にある優しさ、思いやりを身近な人にしっかり伝えること」だそうです。そして、家族を大切にすること、友達を大切にすること、勉強をする、そんななにげない一日一日を送れることが、一番の幸せなことで平和につながっていくことになるのです。今回広島に行って学んだことは、「戦争は悲しみしか生まない」ということです。希望や夢を奪って、残されたのは悲しみだけでした。何も生まない戦争を行なうのは無意味です。だから私は「争いのない世界」を望みます。争いのない世界を目指して広島で学んだことを色々な人に伝えていきたいです。

## 「平和を考えて」

青梅市立第二中学校 2年 石田 光

みなさんは「真の平和」という言葉を聞いて、何か思い浮かべること、考えることはありますか。「平和」だけであれば、戦争がない世の中、いつもの日常、など人それぞれに考えることがあると思います。しかし、「真の平和」と言われると、あまり考えが浮かばないような気がします。私が最初にこの言葉を聞いたとき、意味がよくわかりませんでした。けれど、今回ピースメッセンジャーに参加して実際に被爆した方々のお話を聞いたり、被爆建物や資料を見て、原爆について学び、平和について考えることで、この言葉の意味を理解することができるようになったと思います。

私は事前研修のとき、アメリカが原爆を投下する前に実験をしていて原爆の威力を知りながら投下したということを知りました。そのことを知ったとき、なぜ同じ人間なのにこんな残酷なことができるのだろう、と思いました。そして、こんなことが二度と起きてほしくないと強く思いました。

又、実際に広島に行ってみて印象に残ったことがいくつかあります。一つ目は被爆者お二人の事についてです。一人目の笹口さんは、原爆が投下される前の楽しい生活を話すときの表情と原爆が投下された後のとてもつらいことを話すときの表情がまったく変わらないように私には見えませんでした。私だったら楽しいことは明るく笑顔で、つらいことは少し暗く話すと思います。けれど笹口さんは、何を話すときも表情を変えずに淡々と話しているように見えました。それが、とても印象的で、原爆が投下される前後の思い出は、感情がぬけ落ちてしまうのかなど、思う程でした。二人目の塚本さんのお話は、戦争を学ぶだけで終わらせるのではなく、それを平和のためにどう生かすか考えることが大切だとおっしゃっていました。この言葉を聞いて、この貴重な体験を無駄にしないようにこれから頑張っていこうと思いました。

二つ目は、平和記念式典の中の平和への誓いで使われた「未来の人に戦争の体験は不要です。しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。」という言葉が印象に残りました。

今、日本は終戦してから72年という年月がたち、当時20代だった人の多くは亡くなってしまっています。つまり、本当の戦争を知る人が減少しているのです。そんな中で、これから先の未来を生きる者として私たちは戦争について深く学び平和について考え、それを後世に語りついでいく必要があると私は思います。そこで、最初に書いた「真の平和」について私の考えを書きたいと思います。私にとって「真の平和」とは、核に守られた平和ではなく、お互いを尊重し合い、一人一人が思いやりのある行動をとり争いが一つもないことです。

私はこの考えを忘れずに、平和の為に自分ができることを考え、小さなことから一つ一つ行動に移していきたいと思います。



## 「平和は、世界中の人々の宝物」

青梅市立第三中学校 1年 稲葉 葵

「平和」は、世界中の人々の宝物であると思います。戦争がなければ平和ではなく、自爆や自殺などの争い事が全てなく、人類皆平等である事が平和です。

現在では、宗教的な争い、テロ、核兵器の保有などが問題です。シリアでは、難民であって目的地に行きたくても、受け入れてくれない国や地域。または、行く最中に、船が小さ過ぎて落ちて、おぼれたり、死んでしまったり…今も戦争、内戦している国もあります。

核兵器では、北朝鮮によるミサイル発射、それとは別に、北朝鮮の工作員による、『拉致問題』、ロシアやアメリカなどは核弾頭保有数最大の国であります。核兵器は、人類に課せられた大きな課題であります。核兵器のない世界にするには、原爆ドームや慰霊碑などを残すと共に、ヒロシマ市民、ナガサキ市民をはじめ、世界中の人々の平和を強く願う意志を通し、政府や「NGO」、核兵器禁止条約会議、平和首長会議などで結集し、国連、国政で意見や、質疑し、核兵器のない、平和な世界の実現を目指すことです。なるべく各国に平和主義があってほしいですし、核兵器をなくす、減らす取組みを更に前進させるのが核兵器廃絶への一つの取組みではないのかとも私は思います。

宗教的な部分では、互いの想いを分かり合い、周りの人々、国が止めれば良いのではないかととも思います。

このように、国連や国政、国民、世界人類が協力し合えば、核兵器や、核の保有、争いもなくなり、さらには、世界平和が生まれ、人類皆平等、どんどん平和を定期的に作っていき、後世の人々が、平和な世の中で過ごしてほしい。それが私の思う『平和』です。

絶対に人類は、『平和』がほしいはずですが。被爆者の方が亡くなってしまいう時代になりますが、今の私達が、後世に伝えるのも、平和作りへの『第一歩』だと思います。

## 「広島の人々の『平和』」

青梅市立西中学校 3年 藤村 夢音

今回青梅・羽村ピースメッセンジャー事業の派遣団員として、2泊3日で広島を訪問して来ました。私は「広島の人々の『平和』とは何かを考える」を抱負として、3日間取り組みました。

一日目、当時14歳で女学生だった笹口里子さんのお話を聞きました。笹口さんは、路面電車の運転手や車掌をしていた男性の方が戦争のために兵士になったため、広島電鉄株式会社は人手不足になって「車掌をやってくれないか。」と頼まれたそうです。そして、車掌を務めることになり家政女学校の勉強と車掌の仕事を両立して毎日寮で過ごしていました。当時の食事は竹の食器に、大豆の油のかすが入った大豆ご飯・漬け物・味噌汁だったそうです。8月6日午前8時、いつものように食事をとり掃除をしようと思っていました。ところが、午前8時15分に大きな青白い光が「パッ」と光ったのです。そして、長い時間笹口さんは気を失ってしまいました。

笹口さんは、世の中がもっと仲良くなって人間同士の憎みを直し、戦争のない平和な世の中にしてほしいと願っていました。

その後、旧広島陸軍被服支廠を見学しました。ここは、もともと兵員の軍服や軍靴などを製造する場所でした。しかし、原子爆弾が投下されて爆心地から約2.7km離れていた被服支廠は外壁の厚みが60cmと厚かったこともあり、焼失や倒壊は免れ救護所として使用されました。そして、避難してきた多くの被爆者がここで息を引き取りました。

二日目、旧制広島二中23期生の田淵廣和さんのお話を聞きました。田淵さんは幼い頃から軍隊教育を受けていたため、軍隊のことが頭につまっていた遊ぶことはあまりなかったそうです。そして、仕事の場所は軍の命令で決められていました。あの日、間違いなく2年生の名が石に刻まれるはずでしたが、偶然としかいいようのない勤労作業の割り振りが、生死を分けたのです。田淵さんは、ひどい火傷を負って家まで帰りました。母親は、田淵さんの顔を見て泣いたそうです。日本酒は火傷に良いので、毎日二合くらい飲んでいました。そして、戦争が終わったとき「ホッ」としたそうです。

田淵さんは、原爆は落としてはいけないもの、世界の国々は仲良くしなければならないこと、そして再び戦争にならなければ良いと言っていました。今でも、慰霊碑や原爆ドームを見ると礼をしたくなると言います。

私は、広島に行ってたくさんのことを学び、そして貴重な体験をすることが出来ました。また、被爆体験語りを聞いたり、いろいろな建物や資料館を見学し、改めて原爆の恐さを感じました。平和な世界をつくるのは、難しいかもしれませんが、でも、平和な世界を築いていけるよう、私たちが次の世代に今回学んだことを伝えていきたいと思います。



## 「広島で原爆を学んで」

青梅市立第六中学校 2年 折内 瑠渚

私は広島に行って、印象に残っているものが三つあります。

まず一つ目は、被爆者、笹口里子さんの話です。笹口さんは当時、中学生でチンチン電車の車掌をやっていたそうです。笹口さんが被爆したのは宿舎でした。朝ご飯を食べ始めた頃、遠くで何か光ったと思ったら、青白い光が広がり、熱風がおそいかかってきて気絶しました。原爆が落ちたその瞬間は気絶してしまうほどの強い熱風がおそいかかってきたんだと思うと、とてもこわかったです。笹口さんの話を聞いて、思った事は、笹口さんの場合、原爆が落ちてくるまでは、普段の生活が、幸せだったという事です。

二つ目は、旧制広島二中、23期生の、新出稔雄さんの話です。8月6日。新出さんはその日、作業場所が変更になり、爆心地から2km離れた場所で、8時10分に広場に集まっていた所だったそうです。山の方から海の方に向かって、B29が飛んでいくのが見え、機体から落下傘が落ちてくるのが見えた後、息ができなくなってしまう程の熱風におそわれたそうです。その時持っていたおにぎりはどこかに消え、肩からかけていた水筒だけ、残ったそうです。爆心地に近かった1年生は、全員亡くなられたそうです。避難の際、防空壕を貸してもらったうえに、ご飯ももらったのに、その人にお礼を言えていないのが、今も心残りだそうです。これを聞いて、思ったこと、感じたことはすぐに相手に伝えなきゃいけないなと思いました。新出さんの話を聞いて、新出さんも、笹口さんと同じ様に、いつも通りの生活をしている中で被爆し、原爆が落ちるまでは、毎日楽しかった、という事が分かりました。

三つ目は、原爆ドームや被服支廠などの、被爆して、まだ残っている、『実物』の物です。被服支廠は、外の鉄の扉が曲がってしまっていました。しかも、その鉄扉が、とても分厚い物だったので、びっくりしました。中がとっても暗くて暑かったのを覚えています。原爆ドームは、中が全部くずれていたけど、鉄骨の部分が残っている、写真でよく見た物でした。でも、実物はやっぱり迫力があって、当時の事が浮かびあがってくるようでした。被爆電車も走っている所を運良く見ることができました。やっぱり、実物を見るのは、とてもこわかったけど、すごくいい勉強になりました。

今回、ピースメッセンジャーとして、広島に行き、実際に話を聞いたり、見てきたりできて、良かったと思います。私達のような人が積極的に戦争、原爆の恐ろしさを伝え、平和についてしっかり考えることが大切なんだという事が分かりました。これからも核がなくなることを訴え続け、過去に起こった戦争などが起こらないような世界にする為に、私達自身が、しっかり考えていき、出来る事を、なるべくやっつけていこう、と思いました。

## 「忘れてはいけないこと」

青梅市立第七中学校 3年 浅井 初音

私が今、一番覚えていること。正確に言うと、広島から帰ってきても頭から離れなかったこと。それは、私がお話しを聞いた、旧制広島県立第二中学校23期生の田渕さんです。私は、田渕さんの笑顔が頭から離れません。とても優しい笑顔でした。ずっと笑顔でした。原爆投下直後のことを話しているときも、私達へのメッセージを話しているときも私達に気を遣って笑顔のときもあったし、「今、もみじ饅頭が大好き!!」と話したときの本当の笑顔もあって、そのすべてが鮮明に記憶に残っています。そして田渕さんが発した言葉を思い出すと、一つ一つが重く心にジーンと乗っかってきます。終戦から72年で、日本はとても変わりました。どんな酷い言葉でも、今では、軽く相手にぶつける者ばかりです。本来なら、重くて決して簡単に言うてはいけない酷い言葉でも、72年で、言葉に対する意識もとても軽くなってしまいました。普段、そんな世の中で生活しているからでしょうか。とても現代が醜く感じました。

「今でも、亡くなった友の面影が残っている」と、今でも重いものを背負っている人がいて、それを繋いでいけるのは、私達しかいないのに、酷い言葉と意識せずに発し、そして時にその言葉を真剣に受け止め、自ら命を絶っていきます。これは、戦争を経験した人には、理解し難いものであり、それがなくなることが、被爆者の願いでもあります。この話を聞いた時、すぐに思ったことは、「この方達にこんな思いをさせてはいけない」ということです。私は、広島に行って、平和のために動いている人達を、数えきれないほど見てきました。でも、東京では、平和のために動いている人は少ないです。平和をしっかりと考えている人も少ないです。それは、日頃の生活で分かると思います。平和を考えるために、私達は、たくさんの人の思いに、耳を傾けなくてはなりません。それが、どんなに辛い話でも怖くて目を背けたくなるものでも、そのことを見て、聞いて、今までの自分達を見直すと共に、「もう二度とあってはいけない」、「自分達には繋げる使命がある」と動こうとする気持ちが作られることが、一番大切なことではないでしょうか。私は、今現代で生きている人に一番必要だと思うのが、奪い合ったいくつもの尊い命と、戦争の時代に懸命に生きてきた人と、核兵器という傘があるから、日本人のいう「平和」が守られているということ。そして、それは本当に平和というのかということなのです。

私達ピースメッセンジャーは、どんな形でも、少しずつ聞いたことを伝えていく使命があります。広島や長崎の平和への思いを、一番知っておかなければならないのは、私達日本人です。伝える人に必要なのは、聞いてくれる人でもあります。自分達の力で、世界が仲良くなれるように、被爆者の方々の思いを、しっかり伝えていきます。



## 「平和について」

青梅市立第七中学校 3年 木村 純麗

今回私が広島に行って印象に残っていることは、被爆者の方から話を聞いたことです。今まで社会の授業やテレビで原爆のことを見ても、正直「そうなんだ」くらいのことしか思わずほかに思うことも特にありませんでした。

初日に笹口さんのお話を聞き、そのお話の中で休みの日は映画を観に行ったり、写真をとりに行ったという話がでてきてとても驚きました。私はそれまでの勉強で、休日の楽しみなんて何もなく、ただ、毎日国のために働いていたとしか習っていませんでした。また、自分は戦時中の人々の精神年齢は実際の年よりも高いというイメージを持っていました。でも笹口さんが腐った死体の前を鼻をつまんで走って通りすぎることをしたと聞いて、実は戦時中の中学生は私たちと同じ中学生だったということに気づかされました。私は戦時中の子どもたちを、知らないうちに特別に考えていたということにも気づかされました。

当時、旧制広島二中生だった山本さんも自分が思っていたような体験はしていませんでした。山本さんはとても運がよく、家族の中でだれにも原爆の被害はありませんでした。山本さんは「自分はとても運がよかった。でも運がいいと言っているかわからない」と言っていました。山本さんの幸運の裏には必ず、大きな犠牲があると私は思います。きっと山本さんもそれを思っていてそのような言葉を言ったんだと思います。原爆は生きている被爆者の中に今も残っていました。話を聞いていると、今まで他人事のように思っていた原爆が急に恐くなりました。今までただの過去の出来事としか思っていなかった自分を殴り飛ばしたくもなりました。私はこんな目に遭いたくはありません。なので、みんなに核兵器の恐さについて知ってほしいと強く思います。また、今回の事前学習により知っているようで全然知らなかった戦争や広島状況などを知れました。たくさんを知ることにより、戦争を違う目で見ることができました。

今回広島に行って「平和な世界で過ごしたい」という気持ちがさらに強まりました。どの国も戦争をして得をするのは国の偉い人です。偉い人になれないのなら、戦争の恐さを周りの人に教えるしかないと思います。戦争を国全体に教えるには果てしない時間がかかりますが、誰にも教えないと戦争は始まります。だから、私は少しずつみんなに戦争の恐さを伝えていきます。

## 「平和のために私ができること」

青梅市立霞台中学校 3年 上原 沙弓

「平和」とは。この事業に参加する前はこれを聞かれたら、戦争がなく、安心・安全に暮らせること。特に深く考えずにこう答えていました。しかし今、同じ場所にいても人によって平和の定義が違っていると分かりました。広島でお話を聞き私の中の平和の定義は、皆が自分の、そして他人の命も全て大切にできることだと思います。

私は広島でいろいろな経験をしました。その中でも主に三つのことが私の考えを変えました。

一つ目は、被爆者の方々のお話です。この方達のお話の中で、何度もでてきた言葉があります。それは「お国のために」です。お国のために働けることはありがたい。お国のために死ぬ。お国の役に立つ。そんな気持ちは私には理解できませんでした。そして、情報を操作し、そのようなことを教え続けるのはまるで洗脳のように怖いと思いました。これを言っていた方の中に旧制広島二中の23期生の浅野さんという方がいます。浅野さんは平和について何ごとも当たり前じゃない。平和の尊さに気づいて大事にして欲しいと言っていました。

二つ目は、平和記念式典です。この中で「核兵器が存在し、その使用を灰めかす為政者がいる限り、いつ何時、遭遇するかもしれないものであり、惨たらしい目にあうのは、あなたかもしれません。」と広島市長が言っていました。その後ろで燃えている平和の灯を見て、とても怖くなりました。核が世界から消えるまで燃え続ける平和の灯が一刻でも早く消えることを願います。そして、これが消えた後も、広島・長崎の悲劇を伝え続けなければ、再び同じことが起こるかもしれません。そのようなことが起きないために被爆者の方々から直接お話が聞ける最後の世代として、次の世代にしっかりと伝えていきたいです。

三つ目は、中澤晶子さんと被服支廠です。中澤さんは、広島在住の児童文学作家さんで、原爆をテーマにした本も書いている方です。被服支廠の中で峠三吉の「倉庫の記録」を朗読してくれました。この詩は、被爆直後からの被服支廠の様子を表した詩です。この詩を暗く、静かな被服支廠の中で聞いていると、タイムスリップしたように感じました。そして、とても恐くなりました。

二度と、このような核兵器による被害を起こさないために私はこの被害を多くの人々に、伝えます。そして、核兵器のない世界が一刻も早くできることを願います。世界の人々、全員が笑顔で仲良くできる世界になってほしいです。最後に、指導・サポートしてくださった、先生方、リーダー、事務局の方々のお陰で良い経験ができました。ありがとうございました。

## 「尊い平和を考える」

青梅市立吹上中学校 3年 師岡 倫聖

1945年8月6日。8時15分、雲一つない空から原子爆弾、「リトルボーイ」が地上500メートルの上空で、炸裂しました。原子爆弾は、人の影を石に焼き付けるほどの強い光と、3000度から4000度にも達した強い熱線、放射線により一瞬にして広島市内を包みこみました。そして、多くの尊い命が奪われました。また、その瞬間酷いやけどをおい、「水が欲しい。」という人々が街や川にあふれていました。

僕は、実際に広島に行き被爆者の方のお話を聞きました。

当時の広島市は、男性の多くが戦場に行っており、子供から大人まで多くの人が、国のために働いていました。その中の子供の多くは、勉強の時間よりも働いている時間の方が多いという時代でした。

今の自分と照らし合わせても、全く正反対で、当たり前のように勉強する時間があり、一日をとっても自由に生活できています。その戦争中の仕事は、建物疎開というもので、空襲で火災が発生した時に、火が広がらないように建物を解体する作業でした。当時は、「お国のために働けるので仕事をして幸せだ。」と、思っていた人もいたそうです。

また当時の食事はとても質素で、ご飯の中に大豆、漬物というものでした。そのため、栄養が足りず、僕と同じ年でも、140センチしか身長がなかったと聞きました。

これらの戦争の事実は、今の日本では到底考えることができません。

しかし、世界の片隅には昔の日本と同じ様な状態になっている国がたくさんあります。

去年には、シリアでサリンを積んだ爆弾が民家に落ち、多くの人が命を落とし、後遺症に苦しめられています。その中には、罪のない子供もたくさんいました。このようなことが世界ではまだ起きていると知って、とても心が痛くなり、こうしている時間でも尊い命が、大人の勝手な行動で奪われています。

僕は、様々な事を考え、調べました。その中の一つに、シリアに住む一人の、少女の言葉が目に入りました。「爆弾が落ちてこない空の下で遊びたい。」という言葉でした。この言葉を見た瞬間、産まれた時から戦争を体験していると思い、自分とはかけ離れた生活であることにとっても胸が苦しくなりました。

最近の世界は、強い武器を持つことで、権力を見せつけていると思います。このままでは、昔の日本の様に戦争になると思います。そのようなことが起きないためにも、一人ひとりが少しでも、「平和」「戦争」について、考えていくことが大切だと思います。

そうすれば、多くの国が一人ひとりの力で「平和」に一歩つながると思います。空は世界を繋げています。爆弾のない平和な世界や空をつくるためにも被爆者の方の重い言葉を自分達の事として考え、これからの将来においても戦争を起こさない世界を築いていく必要があると思います。



## 「良い戦争はない」

青梅市立新町中学校 2年 庄司 結衣

私は、今回の広島訪問を通して、「良い戦争」が存在するかに視点を向け、取り組んだ。

この事柄は事前研修から考えていたものであり、それを確かめたいと強く思っていたものである。結論から述べると「良い戦争」はないと私は考える。その理由として、もし戦争をして、自分の国が勝ったとしても犠牲者は必ず出てしまうし、罪悪感が残ることが挙げられる。そして、広島で語りべとしてお話をしてくださった笹口里子さんも「良い戦争なんか一つもない。」と言っていた。

私が印象深かったものが二つあって、原爆資料館での模型と本なのだが、その二つの共通点として、動きがある事と当時のことを分かりやすく表現していることが考えられる。

原爆資料館では数多い展示物が展示されていたが、やはり人が一番多く集まっていたのは、原爆投下前と、投下後の広島の様子を動く映像と模型で表したものだ。私も見ているうちに感情移入してしまう程であった。原爆の威力は一秒間で直径400メートル進み、最終的には半径2kmの円状に焼けてしまった程、計り知れないものであった。しかし、数値で表すよりも誰もが分かりやすい映像と模型で表すことによって、外国人や幼い子供達にも、より分かりやすく伝えることが出来ると思う。

そして、原爆資料館の下の階に売られていた本や、事前研修や事後研修で読んだ本。それは、戦争全体のそのままだが沢山詰まっているものだった。私は、3日間の中で梶山さんという被爆者の方とお話する機会があった。大野さんという作家が、その梶山さんに取材して作った本がある。私は複数の本を読んだが、特にその本が印象深い。また、本人に会って話を聞いたからこそ本の内容に実感がわいた。

私達が今すぐ出来ること、それはなんだろう。私達は、まだ政治家などの直接政治に関する職業に就くことは出来ない。それでは何が出来るだろう。私は、戦争について学び、教科書の奥を知ることだと思う。過去をみつめ、今としっかり向き合うことだと思う。

最後に、「良い戦争」は無いと断言する。私は今回の広島訪問で、過去を見つめることが出来た。知らなかった事、改めて実感したこと、他にも沢山の学びがある。そして過去と現在をつなげて考えることが出来た。平和は、戦争がなく、世界中が仲良しであること。残念ながら、戦争は今もなお、存在する。同じ地球に生息し、同じ生命体である人間。仲良く助け合い、互いを尊重し、高め合うことは出来ないのだろうか。その第一歩として多くの人が過去を学ぶこと。多くの人が平和を願うこと。平和公園には世界に核兵器がある限り燃やし続けられる「平和の灯」がある。私はこの平和の灯が一日でも早く消えることを強く願う。

## 「ヒロシマに行って」

青梅市立新町中学校 2年 星野 かすみ

私は、今まで平和を考えたことは、ほとんどありませんでした。戦争や原爆について、勉強する前は、平和であるという事は、ただ「戦争がない世界」と考えていました。でも、実際に広島に行って、3日間学んで、私が思っていた平和は変わりました。

変わったきっかけの一つとして、旧制広島県立第二中学校23期生の新出稔雄さんのお話です。戦争が終わったことを実感したのは、夜に電気をつけて、ご飯を食べられることだったそうです。今の私たちの生活の中で、夜に電気の光が漏れてしまうか心配したことがありますか。夜も安心して寝ることはできず、いつも空襲を恐れながら過ごす生活が過去にはありました。今では、こんな事はありません。今の生活が、私たちにとって、あたり前の生活だからです。私は、この話を聞いて、今の私の平凡な普通な生活は、平和なんだと思い知りました。

また、新出稔雄さんは、未来について、「かけがえのない命を大切にして、自分の身近なところから、平和にしていってほしい。」さらに、「良い日本をつくってほしい。」とっていました。

そして、新出さんが考える平和は、若い人と昔の話をできていること。たわいのないおしゃべりができていること。世界が平和になるためには、世界の国同士がもっと仲良くしてほしい。とっていました。私は、その話に強く共感しました。

笹口里子さんのお話でも、戦争がない、世界中が憎み合いをしない世界になってほしいという言葉に、強く共感し、戦争反対という意志を私たちの世代が声に出さなければいけないと思いました。

私は、広島に行って、実際に原爆ドームや広島平和記念資料館で、写真ではわからないことを学ぶことができ、本当にとっても良い体験をさせていただきました。自分で行って見なければ、絶対に平和はわかりません。伝えきれません。人生で一度は必ず行って、平和とは何か、考えてほしいです。

最後に、このピースメッセンジャーに参加することができて、本当に良かったです。

「平和ってなんですか」

青梅市立泉中学校 2年 遠藤 澤

皆さんは、平和って何ですか。と聞かれたとき、すぐに答えられますか。私は、広島に行って一番に実感したことは、平和にすること、その平和を続けることが、とても難しいということです。

72年前の8月6日、広島は、たった一つの核兵器、原爆で、変わり果てたのです。罪の無いたくさんの人達が命を奪われ、また、命は助かったものの、差別を受けたり、子どもに影響があったり…今でも後遺症で苦しんでいる人たちがいます。原爆は広島に、深い深い傷を残したのです。どうして何の罪も無い人たちが、苦しまないといけないのですか。そもそもどうして何の役にも立たない核兵器が、未だに存在しているのですか。原爆死没者慰霊碑の「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」の主語が無いのは、全ては原爆を落としたアメリカのせいではないということだと私は考えます。原爆が落とされた原因は、日本にもあるのではないのでしょうか。私は戦争を体験したことは無いです。だから、戦争や原爆の全てのことは知りません。でもこれだけは言えます。核兵器が存在してはいけません。何の罪も無い人を巻きこんで、苦しめさせてはいけません。ここまで平和について考えられたのは、今回、ピースメッセンジャーとして広島を訪れたからです。これ以上、世界中の人々が築き上げてきた平和を壊さないで欲しいです。

私は、「広島が望む平和」が何なのか、考えました。大きく二つあります。一つは、核兵器の無い世界。これを望んでいるのは、広島だけではないと思います。もう一つは、良い平和であること。戦争で守られた平和、権力で守られた平和は、誰も望んではないと思います。でも私は、一人一人が望んでいる平和は、少しずつ違うと思います。私が望む平和は、平和であることが当たり前の世界です。いつ爆弾が落ちてくるか。そんなことをいつも考えておびえながら過ごす毎日は嫌です。平和であることが当たり前になることは、とても難しいことです。平和は、壊すことは簡単です。でも元に戻すには、たくさんの努力と、長い年月が必要です。今の日本はまだ平和が守られていますが、被爆者の方々の平均年齢は、80歳を超えました。この先ずっと戦争を語ることはできません。なので、これから先も平和な日本を守り続けるため、核廃絶を達成するため、私たちが戦争を語り継いでいく使命があるのではないのでしょうか。



## 「平和とは何か」

羽村市立羽村第一中学校 2年 岩野 耕平

### 「平和を1つの立方体と考える」

この文は、旧制広島県立第二中学校23期生の塚本昭さんからいただいたプリントの一文です。そのプリントには、5つの熟語が書かれていて、それぞれの反対語を考える問題がありました。その5つの熟語は、「戦争」、「貧困」、「格差」、「人種」、「分断」です。そこで、その5つの熟語の反対語を考えてみました。

1つ目の「戦争」の反対語は、「共存」だと思います。なぜなら、「共存」とは、争わず、ともに生きたり、存在したりすることだからです。

2つ目の「貧困」の反対語は、「裕福」だと思います。なぜなら、「裕福」とは、財産があって、暮らしが豊かな様子を表すからです。

3つ目の「格差」の反対語は、「平等」だと思います。なぜなら、「平等」とは、全てに偏りなく、等しいことだからです。

4つ目の「人種」の反対語は、「人類」だと思います。なぜなら、「人類」とは、人間を他の動物と区別している言葉だからです。

5つ目の「分断」の反対語は、「結束」だと思います。なぜなら、「結束」とは、結び束ねることだからです。

これで、立方体の5つの面ができましたが、後1つの面が無いので、自分で考えてみました。平和でない言葉は、「核兵器」です。核兵器の反対語は「私たち」です。この言葉に意味はありませんが、私たちは平和な社会を作ることが出来ます。

僕は広島に行く前後で、「広島」の重みが変わりました。今の広島は被爆したとは思えない美しい街になり、建物も近代的です。しかし、被爆者の心には消えない跡が残りました。被爆時の人々、被害を見て、聞いた三日間は、そのままにはしたくないです。見たことを広めたい気持ちがあります。僕のように「広島」の重みを感じてもらいたいです。量より質で。

8月5日のグループミーティングで、「世界中が奇跡的になればいい。」と福田先生はおっしゃっていました。日本は、72年もの間、戦争をしていません。それは、世界的に見て「奇跡」なのです。と。世界中が平和になるのは、72年後かもしれないし、百年後、千年後かもしれません。しかし、それでは、長すぎます。

「私たち」の意味は、戦争を知らない次の世代に広島を伝え、一秒でも早く核兵器が廃絶した世界にするために、『平和とは何か』を考えさせることであると、僕は思います。

「幸せとは。そして平和とは。」

羽村市立羽村第一中学校 2年 梅林 ゆきの

あなたにとって、幸せとは何ですか。以前の私なら、戦争がなく安全に暮らせる事だと答えていたでしょう。しかし、広島に行ったら、この考えが少し変わりました。

私は広島に行って、当時の人の思いを知る事が出来ました。戦時中は、年齢は関係なく、子供でも「お国のため」に働いていました。きっと、働きたくなかつたろうなと思っていましたが、被爆者の方のお話を聞くと、「楽しかったし、お国のために働いている事が嬉しかった。」とっていて、驚きの気持ちと、なぜだろうという疑問を抱きました。その時の私には、理解できませんでしたが、今では何となくですが、分かるような気がします。

また、もう一つ驚いた事があります。それは、当時の人々の気持ちの強さです。原爆が落とされても、「落ち込んでいる暇なんてない。早く広島に光を取り戻さなければと思った。」とっていて、原爆投下からわずか3日後に短い距離でありながらも路面電車が再び動き出しました。この電車がどれだけの人の希望の光になったことか、考えてみてください。今でもこんな事ができるでしょうか。私はできないと思います。当時は今とは比べものにならないくらい絶望的な状況だったのに、希望の光を見出した、そんな当時の人々の気持ちの強さに心動かされました。

最後に、被爆者の方のお話を聞いて、1番心に響いた言葉があります。それは、「あなたたちは、生きてください。」という言葉です。

生きたくても、生きることができなかつた人たち。生きて家族に会えなかつた人たち。今でも家族に会えていない人たち。そんな人達のためにも私は生きなければ。その人たちの思いを心の奥にしまって生きなければ、そう思いました。

私にとって「幸せ」とは、戦争がないこと。そして、大切な人がそばにいること。生きている事が幸せであり平和です。

## 「笑顔」

羽村市立羽村第一中学校 2年 古川 佳愛

私は、今回ピースメッセンジャーとして、72年前の8月6日に起こったことについて詳しく学ぶため、広島に行って来ました。

私は、ピースメッセンジャーに参加する前まで、いつ広島に原子爆弾が落とされたのか知りませんでした。初めて行った広島平和記念公園で見たものは、とても印象的でした。広島平和記念資料館には原子爆弾の被害の大きさを物語るものがたくさんありました。「伸ちゃんの三輪車」は、当時3歳11か月だった鉄谷伸一さんが、爆心地から約1500メートルのところで被爆した時に乗っていたものです。私は、この三輪車を見て、三輪車は黒こげで、伸ちゃんも熱くて辛かっただろうと思いました。

『平和の灯』も見て来ました。『平和の灯』の火は今もついたままです。この火は、核兵器が地球上から姿を消す日まで燃え続けるそうです。ですが、最近はアメリカと北朝鮮の対立が続いています。先日も北朝鮮のグアム周辺へのミサイル攻撃を警告しました。日本は唯一の核被爆国として、これを止めなければなりません。

しかし、核兵器が世界中から無くなって、平和の灯が消えたとしても、それだけで世界中が平和になったと言えるのでしょうか。私は言えないと思います。核兵器がなくなったとしても、地球上から戦争がなくならなければ意味がありません。

私の考える平和は、決して戦争がない世界と言う訳ではありません。私は、自分の周りの人が皆、笑顔でいられることが平和だと思います。

なぜなら、広島に原子爆弾が投下されて、笑っていた日本人は多分いないと思うからです。原爆が投下された広島は絶望であふれていました。ですが、今の広島は笑顔があふれる町です。これは、一人一人が希望を持って、笑顔でいた証だと思います。



## 「平和を伝えていくこと」

羽村市立羽村第一中学校 2年 光武 航平

平和は、人を思う心、相手の立場を尊重する心、過去の戦争を知って悔い改めようとする心が、すべての人の内になくっては始まらない。その心があって初めて平和にしようと世界は動く。そして何より大切なことは、戦争の惨劇を忘れないことだ。

広島での研修で、被爆者の方々の話を聞くことができた。被爆者の方々が仰っていたことは、「戦争の時代の悲劇を忘れないでほしい」という事だった。

唯一被爆国である日本。72年前のあの日、多くの尊い命が亡くなった。その被害は日本人だけでなく外国の人も含まれていた。人も動物も建物も一瞬にして破壊し、72年経った今もなお人々を苦しめ続ける原子爆弾。そんな無慈悲な爆弾を戦争に使用したことは断じて許されることではない。しかし戦争が始まった理由の中には、日本側の責任によるものもある。多くの命が失われる結果となった戦争を始めてしまったその罪は決して消えるものではない。しかし、奪われた命に対して世の中を平和にしていくその姿を見せること。それが、罪を償うという事だろう。

今回学んだことがもう一つある。それは、今の世の中が幸せだという事だ。戦時中とは比べものにならないくらい食べ物も衣服も満ち足りている。そして何より自由がある。戦争の悲惨さを知らない人はたくさんいる。戦争での体験談、そして今の世の中が自由で平和で幸せだという事を伝えていくこと。それが出来るのは、今回広島に集まったピースメッセンジャーだ。「平和を伝える者」の名のとおり、周囲の人や後世に伝えていくこと。それが一番大切で大事な責務だろう。

改めて、僕は思う。戦争の悲劇を忘れず、今この世の中が幸せであり、その中に生まれてきた自分も幸せ者であることを忘れずに、人を思いやる心、過去を知り悔い改めようとする心がすべての人であって、初めて平和が成り立つと。もしかしたら、ピースメッセンジャーの本当の意味は、その心を人に育むことにあるのかもしれない。とてつもなく長い時間がかかると思うが、世界の人々が戦争のない平和を望むことを僕は願っている。

## 「ピースメッセンジャーになった私」

羽村市立羽村第二中学校 3年 荒井 桜子

8月6日、快晴。72年前のあの日、広島に一つの原子爆弾が投下された。私はこのような事実しか知りませんでした。

私達は平和・戦争とは何か、ピースメッセンジャーとして広島へ学びに行きました。広島に行く前の私が考える平和は、『戦争のない世界』でした。

実際に広島地へ行って見て、当時のまま残っている建物や資料館で目にした多くの物は、戦争の悲惨さを物語っていました。被爆者のお話からは戦争の事、原爆の事、そして、広島街、人々がどう立ち直っていったのかを深く知ってもらい、平和について多くの人に考えてもらいたいという思いが伝わってきました。忘れたくない過去だと思いますが、語り部の方々は平和を願う強い気持ちで語ってくれていたのだと感じました。

平和記念公園にある平和の灯。私はここがとても印象に残りました。核兵器が廃絶されるまで燃え続けるという日本の反核への願いです。私は、この灯が1日でも早く消え、世界から戦争がなくなり、平和が永久に続く事を願います。

8月6日に平和記念公園で行われた平和祈念式典には多くの人々が参列しました。広島市民の方々をはじめ、私達のように日本全国からの参列者、外国から参列した方々もたくさんいました。私はこの平和記念式典に参列した全ての人々、参列できなくてもテレビなどでこの式典を見ていた人、全ての人々が平和を願っているのだと思いました。

世界から戦争が完全に無くなる事は難しいかもしれません。それと同じように、完全な平和が訪れる事も難しい事かもしれません。しかし、私がこのピースメッセンジャー事業に参加して、私の平和への意識が変わったように、世界中の人々が少しずつでも平和への意識が変わって欲しいと私は心から願います。

私はピースメッセンジャーとして私の身近な人から、私がこの目で見て、聞いて、感じた思いを伝える。これが今出来る私の使命だと思います。

## 「戦争・平和と向き合って」

羽村市立羽村第二中学校 3年 石野 史華

私は、ピースメッセンジャーとして広島に行くまで、今の暮らしがあるという事は、当たり前だと思っていました。学校で学び、家族と家で暮らし、友達とたわいのない会話をし、明日が来ることは、私にとって当たり前の日常だと思っていました。

私は今まで、人々が戦い殺し合う戦争から離れ、遠ざかって生きてきました。映像や本、教科書の戦争からも目を背けてきました。ですが、戦争について一人でも多くの人が現実を知り、平和について考えていかなくてはならないと思い、この事業に参加しました。

まず、事前学習では歴史から戦争を学び、話し合いを通して平和への理解を深めていきました。

そして、実際に広島に行ってみて、事前学習では分からなかった原爆の被害の大きさが、思っていたよりもずっとひどい現実を目のあたりにしました。相生橋に立って空と川を見て、当時の状況を想像してみました。燃えさかる広島街と人であふれる川。私は胸がとても苦しくなりました。

被爆者の方の話は、他のどんな話よりも現実味があり、貴重なお話をたくさん聞くことができました。食べ物もなく、住む場所もなかった忘れたい過去、話したくないけれど、話さなければ戦争・原爆について忘れられてしまう現実、辛い思いをしてまでお話ししてくださった被爆者の方に感謝しています。

平和祈念式典は、原爆が落とされたあの日のような雲一つない快晴で太陽がキラキラと輝いていました。私は、広島市長の言葉がとても印象に残りました。

最後に、戦争が起きると『当たり前のこと』は『当たり前』ではなくなってしまいます。今ある平和に感謝し、幸せと人を奪う戦争と、一瞬にして罪のない多くの命を奪う原爆や核兵器はあってはならない、世界中の人々が平和に暮らせる世の中を作っていきたいです。悲惨なものから目を背けず、平和と戦争にしっかりと向き合っていく事が大切だと思いました。当たり前の生活・自由そして命を奪う戦争と原爆は、あってはならないものだということ、平和になるため、今の平和を守っていくために自分には何ができるのかを考えていきたいです。そして、もう二度と戦争を繰り返さないように多くの人に粘り強く伝えていきたいです。



## 「平和とは何か」

羽村市立羽村第二中学校 3年 織田 未夢

平和とは何か。これは、私がピースメッセンジャーとして広島に行く前の事前学習で印象に残っていた言葉です。平和とは何か、と聞かれると、おいしいご飯を食べられる事や、当たり前のように毎日を過ごせる事、と答える人が多いと思います。私も、平和は世界中の人が幸せに暮らす事だと思っています。でも、今回広島で色々な事を学んできた中で、平和という言葉の捉え方は色々あるという事を改めて感じ、幸せな事だけが平和じゃないと知りました。

私は、実際に被爆した方々からお話を聞く時、生々しい話や悲しい話ばかりだと思っていました。「でも、あの経験があったから今の自分がある。アメリカの事も一度も恨んだりしたことがない」と言っていました。すぐく前の事だとしても、周りの親戚や家族、親友を亡くしたり、痛くて辛い、耐えられないくらい悲しい思いをたくさんしたにも関わらず、こんな広い心を持って明るく過ごせるのは、今まで生きぬいてきた人達の強さなのだと改めて感じました。そして、笹口さんは、「今の社会は便利だけど、行き過ぎるとどんどん地球がダメになっていく気がするから、常識をわきまえて、希望を持って明るい方へ進んで欲しい」と言っていました。

そして、小畑さんは、「復興は思うようにいかなかったが、アメリカを憎むだけじゃなく、復興のためにも希望を持って生きないと楽しくないだろう」と言っていて、本当に心の広い優しい人だからどんな辛い事も乗り越えていくことができたのだと気が付きました。また、核の事については、「使わないとしても、身を守るために皆が銃とナイフを持って歩いていたらどう思うのか、それが、本当の平和と言えるのか。また、それらを全て無くすことが平和なのか」とも言っていました。

確かに核兵器を持つことに賛成意見を持つ人がいるのも事実だし、戦争をしたいと思っている人もいます。それが幸せだと感じる人もいます。でも、私はやってもいい戦争なんて絶対に存在しないと思います。そして、武器に守られている平和や、誰かに操られている平和は本当の平和ではないという事を学びました。私は、今まであった戦争や原爆を過去の惨禍として学んでいける事が、今、私たちがどんなに幸せな生活を送っているのかを感じられる一つのきっかけになっているのだと改めて感じました。過酷な状況の中、絶対に生き延びてやろうという強い思いが、町の復興や被爆した人の生きる希望となっていたと思います。心が一つになった時、それが今の平和に繋がる一番の瞬間だったと思います。

今回広島で学んだことは、とても貴重な良い体験だったと思います。そして、被爆した方々やこれから生まれてくる子ども達のためにも、平和な世界を創って欲しいです。私たちはこの世界の国民全員が幸せだと感じられるような平和をずっと願っています。

## 「世界の平和のために」

羽村市立羽村第二中学校 3年 山田 七海

私達は今、当たり前のように平和に毎日を過ごしています。私もピースメッセンジャー事業に参加する前は、戦争についてもあまり考えていなく、この毎日が当たり前だと思っていました。しかし、この事業に参加し、この毎日が当たり前ではない事が分かりました。

広島では、今まで写真でしか見ていなかった被爆建物がたくさんありました。私は今まで被爆者の方の話を直接聞いた事がなかったので、1日目に笹口さんの話を聞くのが初めてでした。笹口さんは、原爆が投下された瞬間、朝ご飯を食べていたと話されていて、原爆は本当に突然で一瞬にして広島の町が消えたんだということが、とてもよく分かりました。当時中学生だった人々やたくさんの子供達までもが一瞬にして亡くなり、罪のない人々がなぜこんなに辛い思いをしなければならぬのだろうと、笹口さんの話を聞いて、とても悲しくなりました。また、旧広島陸軍被服支廠では、実際に爆風を受けた鉄の扉を見る事ができたり、中に入る事ができて、写真で見るともっと戦争の悲惨さについて考える事ができました。

2日目には原爆ドームや平和記念資料館などを見ました。原爆ドームは、被爆前とは変わり果てていましたが、秒速440メートルと想像がつかないくらいの爆風に耐えたと知り、とてもびっくりして想像が付きませんでした。また、2日目には旧制広島県立第二中学校23期生の田淵さんの話も聞きました。田淵さんは当時中学生で、B29から原爆が落ちてくるのをしっかり見ていたと話されました。当時は民主主義などなく、軍隊の教育ばかりで、食べ物がなく芋が2つあれば御馳走でしたが、田淵さんは仕事の面で恵まれていたそうです。今の私にはそれは耐えられないし、日本人の人が皆そうだと思います。平和記念資料館は当時の写真や被害などが細かく説明されていて、衝撃を受けるものばかりでした。3日目の平和記念式典には多くの人々が来ていたのですが、もっとたくさんの方が来て、戦争についてもっと考えるべきだと思います。

私は広島に行く事で戦争についての考えが変わったし、大人になった時に次世代の人達に伝えたいと思いました。今までは戦争は起きないで欲しいとしか思っていませんでしたが、思うだけではなく何か自分達にも出来る事はあるのではないかと、考えるようになりました。これからは、周りにある身近で小さな事だとしても、世界の平和への第一歩になるので、トラブルがあれば解決したいです。また、被爆者の方の話を直接聞くのは、これから難しくなってくると思います。だから次は、直接話を聞く事ができた私達が次世代に伝えるべきだと思います。戦争を忘れないためにも、将来子供達に話したり、どんどん語り継ぐ事が大切だと思います。世界の平和のために、まずは身近な事でも出来る事に一生懸命に取り組んでいこうと思いました。そして世界が平和になる事を願っています。

## 「広島歴史」

羽村市立羽村第三中学校 1年 塩野 百音

1945年8月6日。この日は忘れてはいけない日であり、忘れられない日。

日本は昔から戦争をしていました。そして、何も関係のない広島に原爆が落とされたのです。原爆で何もかも失いました。街も、命も、夢さえも。原爆の被害に合った人々は、髪の毛もチリチリに焦げ、皮膚が焼けてザラザラしていたそうです。また、あたり一面に死体が転がっており、「全身やけど」をした人々が、

「水、水・・・」と水を求め、川に飛び込んでいったりしたそうです。

旧制広島県立第二中学校では、8月6日の当日、1年生が建物疎開をして、急きょ2年生が駅前周辺の草とりになったそうです。この任務は毎日交代で決まっていたそうです。この交代が生と死を分けるなんて誰も考えていなかった事でしょう。

8月6日。とても晴れた日で2年生は爆心地から2kmの所に集まっていました。頭上にB29がゆっくりと飛んでいて、何かが落ちていくのを見ました。急に真っ暗になり、熱風がきて、息ができず、何も聞こえなくなりました。

「死ぬのかな。」

そう思ったそうです。ゆっくりと周囲が見えるようになり、広島は真っ暗でまるで地獄のようだったそうです。ある人は、やけどをして目以外の身体全身を全部包帯で巻かれたそうです。けれど、お母さんは目だけで自分の事を分かってくださったそうです。

8月15日。長かった戦争がやっと終わりました。とっても嬉しかったそうです。鉄砲は全て焼き去り、安心したそうです。しかし、1年生は321人全員亡くなったそうです。12歳から13歳の若い人々が短い生涯を終えました。2年生の身代りでした。

今後、私達が社会を引っ張っていく世代になっていきます。また、私達が被爆者の方の生の声で話を伺える最後の世代でもあります。だからこそ、色々な人たちに今回学んだ事を伝え、広げて次の世代に繋げていきたいです。思いやる優しさで心の平和を身近にしていき、この平和を少しでも広げ、世界を平和にしていきたいです。



## 「人と人のつながり」

羽村市立羽村第三中学校 2年 佐藤 七海

今の広島には多くの人々がいます。車に乗って出かける人、おいしい物を食べる人、お店で買い物を楽しむ人。それぞれ様々な事情がある中で、自分なりの楽しみを見つけながら日々を過ごしているのだと思います。しかし、この笑顔あふれる日常は以前からあったものなのでしょうか。心から幸せな生活を送れている人ばかりだったのでしょうか。

1945年、8月6日午前8時15分。広島町に原子爆弾が投下されました。一瞬にして町は色を失い、焼け野原になったとお話を聞き、私は想像以上にショックを受けました。写真や教科書の文字でしか知らなかった『戦争』という事実を、改めて自分自身に突き付けられたような気がしました。当時、広島で暮らしていた人はどうだったのでしょうか。家族を初めとして、友達・仲間を失った人、家を失った人、他にも自分の大切な物を失った人が大勢いたという事を聞きました。けれどもこの時、人はいつまでも下を向いていた訳ではありません。被爆した3日後には青空の下で授業を。長い目で見れば、敗戦国である日本は、19年後に国際大会であるオリンピックを開催しています。辛い出来事があった中で、苦しい思いをしていた人々は沢山いたと思います。それでも、このように立ち上がる事が出来たのは、人が互いに励まし、助け合いながら、前を向いて生きていこうと努力していた証なのではないかと考えました。

もし、今私達の住む町を零(ゼロ)からスタートさせなければいけなくなった時、このような事ができるでしょうか。こんなにも早く、自分達の未来を取り戻す事ができるでしょうか。自分の胸に手を当てて、一度じっくりと考えてみてください。

現在の私達の暮らしはとても豊かだと思います。欲しい物が手に入り、勉強する事ができ、自由な時間があります。しかし、昔からそうだったのではありません。大変な思いをしながらも、一生懸命生きようとしていた人がいたからこそ、今の平和があるのだと思います。

平和とは、人が人を思い合ってできるものだと思います。けれど、戦争も人が人を思いぶつかりながら生まれてしまうものです。どうしたら、皆が『平和だ』と思える世界をつくる事ができるでしょうか。相手の事を考え、自分にしかできない事をする。それが、平和に近づくための第一歩だと思います。

私達は、戦争を体験した訳ではありません。それでも、『戦争』という事実を知り、それについて考える事ができます。自分なりの思いを込めて、周りに伝える事もできます。今ある物を大切に、人との繋がりを大切に、平和な未来を築いていきます。

## 「広島に行ってみて」

羽村市立羽村第三中学校 1年 中山 彩嘉

第二次世界大戦が終わってから、72年という月日経ちました。戦争を経験した人は、どんどん少なくなっていて、平均年齢は81.4歳です。そんな中、私達は被爆された方々から、直接、お話しを聞く事が出来ました。

まず、笹口里子さんのお話しです。笹口さんは、当時、女学校に通う1年生で、2つ上のお姉さんは3年生でした。その頃、広電（※広島県広島市を拠点に路面電車・バスを運行する企業である広島電鉄の略称）の仕事と勉強を掛け持ちしていました。8月6日、朝ご飯を食べ始めようとした時、一瞬ピカッと青白い色が見えました。それが原爆です。その時は、特に警戒を知らせる警報は出ていませんでした。

次は、新出さんの話です。当時、中学2年生だった新出さんは、その時、広場に集まっていた。雲一つない空の下、一瞬、真っ黒になり、熱風で息が出来ない、音が聞こえない、座っていた木が浮いたような感覚が襲いました、と。このように、不意に原爆は落とされました。

戦争が終わって今、思う事を聞いた時、こんな返答が返って来ました。まず、笹口さんは、「今の若い人は幸せだと思う。戦争をして良い事は1つもないから、戦争もなく、憎しみ合うこともなく、平和でいればいい。」と言っていました。

この時、私は今まで普通にしていた事、普通に過ごしていた日々は、決して当たり前ではない事に改めて気が付きました。

新出さんは、「今、この日本は奇跡だ。ありがたい。本当に恵まれていると思う。しかし、原爆を落として、戦争が早めに終わったのは違うと思う。一般市民を巻き込むのはひどいと思う。何十万人との人を巻き込んだ原爆は、落とすべきではなかった。」と言っていました。

私も確かに日本も悪い部分はあったと思います。けど、原爆を落とすのは良くないと思います。

これからは、このような話を聞いて自分が出来る事を身近な所からでも、出来る平和な活動を続けて行きたいと思います。また、私達は実際に戦争を経験した訳ではありませんが、後の世代に伝える事は出来ると思います。

## 「平和の願い方」

羽村市立羽村第三中学校 2年 山内 杏流

広島で学び感じた事は、私が考えていた平和と被爆者の方が考えている平和は違っていた事です。広島に行く前までは、戦争のない平和と考えていましたが、被爆者の方は、『平和』について深く考えていました。

私は、1日目に笹口さんの話を聞きました。笹口さんは、広島電鉄（路面電車）の車掌をしていました。あの日は、食堂で朝ご飯を食べようとした時に被爆しました。笹口さんに平和について考えている事について聞くと、「戦争のない、憎しみ合いのない社会」と言っていました。

2日目には、旧制広島二中の23期生の山本さんに話を聞きました。山本さんも建物疎開という仕事をしていました。本当は建物疎開と勉強を1日交代でやる勉強の日でした。しかし、先生の指示でさつまいも畑の草むしり作業に変わったため、生きることができました。山本さんにも平和について、どう考えているかと聞くと、「戦争のない、子供を苦しめることのない社会」と言っていました。

2人の体験者の話を聞いて、当時、私と同じ14歳なのにすごいと思う点がありました。それは、14歳なのに、仕事をすることです。笹口さんと同じ車掌の仕事に就くと、お客さんの命を預かることになり、それを考えると、とてもできません。また、仕事の合間をぬってまで勉強する所もすごい所です。早朝の始発から、夜遅く終電までやる仕事、苦になって直ぐに辞めたくなくなってしまいます。そんな仕事なのに、笹口さんは車掌の仕事を心から好きなんだなあと思いました。

そして、山本さんは、亡くなった旧制広島二中の1年生のために歌を作る所がいいと思いました。山本さんが、1年生が全員亡くなった事を知ったのはテレビでした。そこから、編集者や詩を書く人など多くの人を集めてできた『レクイエム 碑（いしぶみ）』。思い出したくない記憶も掘り起こす勇気がすごいと思いました。自分がもらった幸運を、しっかりと『碑』として語るところがすごいと思いました。死ぬまでに1回は『レクイエム 碑』を聞きたいです。

72年も経っても、世界から核兵器が消えない。つまり、これは、「平和の灯」の火が消えない事を意味しています。この3日間で、私は平和について改めて考えました。私の考えは、世界から核兵器をなくし、一人でも多くの人に戦争の恐怖を伝えられること、それが本当の平和だと思いました。

2人の体験談、資料館で見た事、小学生が話した『平和への誓い』など、広島で見たり、聞いたりした事を自分なりに噛み砕いて周りの人に伝えられるようにしたいです。

## 「ピースメッセンジャー事業を振り返って」

青山学院大学 2年 楠見 奈都子

この事業を通して、実際に目で見ることで、身近なものとして捉えることがいかに重要であるかに気づかされました。事前研修の段階から、ピースメッセンジャー事業に参加している子どもたちは、人並み以上に広島について、戦争について知識を持っていました。しかし、そのような状態でも、中学生はもっと知りたい、自分が教えられてないことを学びたいという意欲がとても強く、それが活動の原動力となっていました。

実際に広島に到着してみるとすぐに快晴の空を見上げ、夏の暑さを感じながら、1945年8月6日のことを考えている姿が見て取れました。その後もたくさんの方のお話を聞き、それぞれの意見を交換し合う中で、中学生の中に言葉でうまく表現できない、初めての感情が芽生える姿を見ることができました。きっと、初めて戦争が身近なものとして感じられ、驚きや恐怖が入り混じっていたのだと思います。お話を聞くうちに日に日に、まるで自分が体験したかのような気持ちになっていて、3日目にはお話を聞きながら涙を浮かべている姿も見取れました。授業や本で同じ話を聞いても、ここまで感情を動かされることはなかったはずで。

戦争の悲惨さは様々な形で中学生に教えられます。しかし、自分に置き換えて、今の自分の幸せに感謝する気持ちや、これからの日本の未来を作っていく存在としての役割や責任は教えてもらうことができません。自分の中から、やっぱり戦争はたくさんの人を傷つけるもので、絶対に繰り返してはいけないものであり、私たちにはそれを伝える使命があるとピースメッセンジャーたちが強く思ったのはこの事業があったからです。

わたし自身も活動を通して、広島で起きた事実をしっかりと目にすることができました。戦争により、時の流れだけでは解決できないほど深い傷を負った人がたくさんおり、いまでも多くの人が苦しめられています。直接的な被害を受けた人だけでなくその周りの人、また、植物や動物も同じように被害を受けていることを思うと、私たちが想像している以上に多くの人が傷つけられていると容易に想像できます。被爆体験を聞き、被爆した建物や植物を見て、実際にその傷に触れてみることで、平和であることがいかに尊いか、戦争はどうしていけないのか、その答えが身に染みてわかりました。私たちは原爆投下を体験した人から話を聞くことができる最後の世代であると同時に、体験した人から聞いた話を伝えていかなければならない世代でもあります。私たちが伝えていかなければ、どんどん風化してしまいます。後世に伝えるために、思い出すのも辛いのにお話や本、詩という形で残してくださる方や、生き続けようと思ってくださる方の思いは絶対に無駄にはしてはいけないものです。

ピースメッセンジャー事業がなければこのような考え方を身に付けることができませんでした。たくさんの方の協力のもと、自分の力だけでは見学することができない場所に連れて行っていただき、多くの出会いの場を作っていただけのおかげです。今回この事業に携わってくださった、青梅市、羽村市の中学生、引率してくださった先生方、市役所の方々、広島で出会った方々、貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。



## 「平和のために」

桜美林大学 2年 奈良野 りさ

今まで平和という言葉を知くと、「戦争がない世界や異文化や異民族がお互いを理解し合っている」、そんな漠然と大きなことばかりが頭に浮かんでいました。ですが広島に行き、被爆者の新出さんや笹口さんのお話を聞いて、本当の平和とは何か自分が自分の中で変わりました。原爆の被害を受けた新出さんも笹口さんも平和とは何かという質問に対して、一人一人が心の中に相手を思いやる優しさを抱き、人間同士憎み合うのではなく身近なところから平和の輪を広げていくこととお話しされていました。私は今まで大きく平和とは何かを考えていたけれど、この時平和を築くことは誰にでもいつでもでき、人々の心の中で育たせられることなのだと考え方が変わりました。この原爆に限らず、戦争を体験した人たちは年々数少なくなっています。旧広島陸軍被服支廠や元安川などの原爆の被害があったところへ行くたびに、72年前のあの日ここで何があったのかを想像しましたが、今その場所の周りにはビルがあり栄えていて、この場所で悲惨なことがあった面影がなくなっているように思えました。来世に平和を残すことは、この過去の出来事を忘れないようにすることが大切です。このピースメッセンジャー事業で広島の方々から聞いたこと感じたことを、ただ自分の経験だけにするのではなく他の人に伝え広げ、より多くの人々の心に「平和とは何か」、原爆の被害を受けた人たちの思いを残していきたいです。

このピースメッセンジャー事業はただ広島に行き平和を学ぶのではなく、本当の平和とは何か考え、自分が広島の方から受け継いだ話を他の人に伝えることができる場があり、平和の輪を広げられる事業だと思います。また大学生は中学生グループのリーダーとして、どのようにサポートしたら中学生が広島へ行く前に決めたそれぞれの抱負を達成できるのか、また広島に行ったとき小さなことも欠かさず吸収しやすくなるのかを私はいつも考えて行動していました。ですが展示物一つ一つの細かなところに興味を持ち、話を聞くととき積極的に質問をしている姿を見て、中学生の学習に対する姿勢や意欲から大きく刺激をもらいました。さらに一緒に学習や行動をすることで、一つのことでもみんなでやり遂げるという目標から深まる絆も感じることができました。リーダーを務めたことにより自分だけの観点だけではなく中学生の意見や観点と比べることができました。

ピースメッセンジャー事業から広島や原爆、平和についてはもちろん、リーダーシップ力をも学びました。数多くの貴重な体験ができたことに感謝し、このことを周りの人たちに伝え、平和とは何かをこれからも学び続けます。

## 「ピースメッセンジャーを振り返って」

帝京大学 1年 松林 太輝

今回の広島派遣の全体を振り返り一番感じたことは、現地に行くことの重要さです。今では簡単にスマートフォンで写真を見ることはできますが、写真だけではその場の空気感を感じることはできません。実際に現地に訪れることで五感を使い、より良い学習ができます。私は今まで教科書で見てきたモノを自分の目で確認できたおかげで、今までの間違った知識を正すことができました。さらに現地の方々の話を聞きながら見学できたことは、とても良い体験でした。資料を保存するのも大事ですが、こういった体験談や知識こそが日本の財産であり、もっと大切にしていかなければならないと思います。

平和記念式典では原爆が投下された日から72年経った今でもたくさんの方が平和公園に訪れ、式典に参加し平和を祈念することは日本の美しいことのひとつではないでしょうか。今では外国人も大勢訪れるようになり、8月6日が年々、世界中の人々の心の中に意味のある日として残っていくのが実感できました。

広島派遣で最も驚いたことは、旧制広島二中23期生の新出さんのお話の中にあつたこの一言でした。「今までは被爆していたことを隠したかった。」私は今まで被爆体験したという経験は、日本では昔から大切にされていたと勝手に想像していました。しかし、被爆後の日本では、被爆した事実は周囲から避けられる要因のひとつだったことを知りました。身体的に多くの被害を与える原爆は、社会的にも人々に多くの被害を与えていたことに、初めてそこで気づきました。

訪れた場所で最も雰囲気を感じたのは、旧広島陸軍被服支廠でした。あの薄暗く特に何も置いていない建物には写真や話では伝わらない空気が漂っていました。ここで多くの人々がもがき苦しみ、息を絶ったと思うと今生きていることの幸福さを感じました。そして、中澤さんが読んでくださった峠三吉の原爆詩集は私たちにタイムスリップさせてくれるようでした。『その柱から水をねだり、階段からは父親が娘を探した。』まるで自分がその場においてその状況を見ているかのような感覚になり、その感覚は私の中に深く刻み込まれました。

私は今回の派遣全体を通して多くの新しい知識を学ぶことができました。しかしそれは、誰もが簡単に学ぶことができる知識かもしれません。大切なのは現地で感じたことであり、それは私の中にしかないものです。そして、それをできるだけ形あるものにし、多くの人に伝えていかなければなりません。規模は小さくなくても良いと思います。少しでも多くの人に今回私が感じたことを伝えられれば、広島に行ったことが初めて意味のあるものになります。

また、日本人は被害者でもあり加害者でもあります。そして、今生きている私たちは傍観者ではありません。戦争に加担していようとなかろうと、人を殺めていようとなかろうと、私たちは日本人なのです。平和公園にあの火が灯されていようとなかろうと72年前の8月6日、9日に起きた事実は存在し、それは人類が共有すべき事実なのです。

## 「ピースメッセンジャー事業で学び感じた事」

杏林大学 3年 田嶋 克侑

この事業に参加させていただき、私としても多くの事を学び、発見しました。

広島に原子爆弾が落とされた事は歴史の教科書にも載っていますが、この事業はこうした事実のみを教える事業ではなかったと思います。過去の事実のみを並べ、学ぶのではなく、現地に赴き素直に感じた事を大切にして、自己で「平和とは何か」を考える事が一番重要であるとの事業を通じて感じました。それは、『戦争はダメだ。戦争をしたらこうなる。』などの過去の事実を教科書などから学ぶ事では感じるとる事ができない、原爆投下当時の様子を被爆者の方から直接話を聞いて、被爆した事への想いを感じ取るとともに、実際に爆心地や慰霊碑等を見てどう感じたのかなど、子供たちの感性を大切にする事が重要であると感じました。

また、3回の事前研修のみという即席チームでありながらも、班員の中学生のまとまりには、とても助けられました。

広島派遣の初日では、ピースメッセンジャーの移動中の電車・バスなどの様子からは、やはり旅行気分という色がとても強く見うけられましたが、徐々に『ヒロシマ』というモノに触れ、感じた事で子供たちの姿勢が大きく変化していったのではないかと思います。特に被爆体験者から体験談を聞いた際には、参加した中学生には少し難しい部分もあったかと思いますが、単語や表現の仕方などわかる事から理解を深めようとしている姿が印象的でした。

2日目3日目は、厳しい暑さの中にもありながらも、平和記念公園や平和記念資料館の中で学び、感じるんだといった意気込みに関心を受けました。特に慰霊碑巡りでは、慰霊碑の建立の意味や見学予定にない慰霊碑などにも興味を示すなど、少しでも学び・感じ・吸収しようという姿勢がよく伝わってきました。今回の広島派遣を中学生自身が意義のあるものとするために、自ら効率的な慰霊碑巡りのルートを考えるなど、チームのメンバーが意見を相互に出し合う姿は、主体的に『ヒロシマ』を学ぶといった積極性を見ることができました。

広島派遣は限られた3日間という短い時間を中学生が効果的・有効的に活用しようとした結果として、こうしたチーム内における絆が、短い事前研修や現地広島で見られたことは、『ヒロシマ』が中学生に与えた力であったのではないかと感じています。

私自身も、被爆者の方の話しをはじめ、被爆した施設など現地『ヒロシマ』から学び・感じるとるピースメッセンジャー事業を通じて考えた『平和への思い』を、次の世代に継承していくために、多くの方に伝えられるようにしていきたいです。

最後に、この事業は被爆体験者をはじめ、学習指導の先生、市役所職員など多くの方々の支えにより成り立っています。皆様方の支えにより、ピースメッセンジャー事業に参加させていただき、素晴らしい経験をさせていただきました事に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 「充実した平和事業」

杏林大学 2年 佐藤 智子

今回のピースメッセンジャー事業を振り返ってみると、本当にあっという間の経験でした。私は中学生の時に修学旅行で被爆地である広島を訪れていましたが、今回のピースメッセンジャー事業での広島訪問は、青梅市と羽村市の中学生を率いる大学生リーダーとしての立場での参加でありましたので、修学旅行とは異なる立場での体験をすることができ、今後、社会人となる私自身にも非常に貴重な経験を得る事ができる事業でした。

まず、広島研修での1日目に訪問した旧広島陸軍被服支廠での平和学習についてです。実際に広島を訪れて、原爆投下当時の様子を聞いて感じた事は、これまでに見聞等で得た知識をはるかに凌ぐものでした。特に児童文学作家の中澤晶子さんが、戦争当時の事実を綴った詩集の一部を朗読した時、被服支廠の持つ独特の雰囲気と、中澤さんの感情のこもった詩の朗読によって、当時、勉強もできずに働かなければならない現実を突き付けられながら、無念の死をとげる事となった意など、身に染みて感じ取ることができました。また、労働を強いられた女学生の多くは今の中学生と同年代であったため、実際に見学した青梅市と羽村市の中学生にも、この詩集の言葉は心に深く響いたようにも見えました。

被服支廠は耐震性の関係により、今後の立ち入りが難しくなると聞いていますが、被爆建物を後世に残し続けることは、現代人が平和を考える上で非常に意味のある事だと思います。このような貴重な被爆建物を見学できた事を活かし、戦争の悲惨さから学び得た『平和の尊さ』を一人でも多くの人に訴えていきたいです。

次に、中学生との『ふれあい』についてです。今回、この事業に参加した中学生は非常に学習意欲が高く、その意欲は「私が学びたい」と思うほどの積極性や主体性がありました。その一方で、中学生らしい健気さや純粋さも見られました。前述した被服支廠では、実際に多くの人が命を落としていたため、建物に入る事にも恐怖心を抱くような繊細な心も持っている中でありながら、この貴重な機会にできるだけ多くの事を吸収しようと励む姿には心を打たれました。

このような中、私はリーダーという立場に関係なく、一人の学び手として中学生と一緒に学ぶ気持ちで本事業に臨んだため、共に楽しみながらも学びを深めることができました。私は青梅市と羽村市に直接的な関わりはなく、今回のピースメッセンジャー事業は大学の連携事業の一環としての参加ではありましたが、中学生とのふれあいや広島への引率を通じて、平和学習に限らず、私自身が多くの実りある学びを得ることができた本当に内容の濃い事業でありました。

当初はリーダーである事に不安もありましたが、同じ大学生リーダーをはじめ、市の職員の方々や指導員の先生方の温かな支援もあり、無事に事業を終えることができました。ありがとうございました。



## おわりに

ともすればこうした企画は、学校の修学旅行で行っても、原爆資料館や慰霊碑を見て、「原爆は悲惨、平和が大事」というまとめをつくる、言わば「型どおり」のものになってしまうことがよくあります。私に役割があるとすれば、それを少しでも越えること。そのため、被爆関係者の生の声を間近で聞き、今、中学生の前で語るまでの思いや生き方を知り、そこから資料館の遺品や慰霊碑などの背景をできる限り読み解くこと。そして、それを報告会で、自分で考え、まとめ、自分の言葉で語る、伝えることができるように、と心掛けてきました。

そこで、私のピースメッセンジャー事業は原爆の証言者を探すことから。昨年までの2年間は、広島城にあった軍司令部で通信の仕事で学徒動員でしていた岡ヨシエさんからお話を聞いていましたが、岡さんが5月に急逝。心からの感謝とご冥福を祈るとともに、今年はどうするか。

そんな中、辿りついたのが、広島在住で児童作家の中澤晶子さんでした。中澤さんは戦後生まれで被爆者ではありませんが、被爆地広島に関わる作品も書かれていますし、取材・調査等で被爆関係者とも接し、そこから証言者との橋渡し役や被爆建物の紹介などもされています。その中澤さんからの紹介により、当時、ヒロデン家政女学校1年生(14歳)の笹口里子さんからのお話を聞く事ができることとなりました。また、中澤さんの協力により、旧広島陸軍被服支廠にも入ることができ、そこでは、中澤さんから峠三吉の「倉庫の記録」(そこが救護所になった様子)も朗読してもらいました。

翌日は、旧制広島二中23期生6人のお話も聞いています。これは、3年前、広島二中1年生の古選浩行さんの弟、一法さんを訪ねた際、偶然、当時2年生である新出稔雄さんと出会ったことに始まっていて、その後毎年来ていただいています。今回は6グループに分かれ、じっくりとお話を聞くことができました。

6日は慰霊式に参加し、8時15分に黙祷。その後、笹口さんの話に触発されてヒロデン本社・千田車庫に行き、被爆電車を見て、その修理もしたという佐久間徳彦さんのお話を聞いたグループや、私が旧制第一県女、現皆実高校の慰霊式に連れて行って、当時1年生で友人のほとんどを失った梶山雅子さんと会って、お話を聞いたグループもありました。

そうそう、バスガイドの松田陽子さんの広島カープ(プロ野球)、カルビーやお好み焼きも実は広島、そして原爆に繋がっているというお話も忘れてはいけません。

私から見ても盛り沢山の2泊3日で体力的にはバテましたが、子どもたちの心の中で、「連れて行ってもらう旅」が、少しずつ「これが見たい」「この話が知りたい」という旅に変わっていったように感じました。そして、さらにそれを事後研修で「平和が大切、なんて行かなくても言えること、行った君たちでなければ言えないことは?」「なぜ、軍国少女・少年が、戦争反対に変化したの?」と揺さぶって、揺さぶって、考えさせ、リハーサルを繰り返し、20日の報告会に辿りつきました。その報告会は、それなりのものに仕上がったと自負もしています(もちろん、厳しい感想や批判も受け入れますが)。

一方で、このレポートの作文はまさに「書き言葉」です。「しゃべり言葉」の報告会とは違って、一人ひとりの作文は、また少し「型どおり」になっているかもしれません。今後は、今、これを読んでいる皆さんが、そこを補い、彼らの感じたことの背景を是非感じ取っていただければと思います。

指導員 羽村市立羽村第一中学校 福田 恵一



本事業を実施するにあたり、貴重な被爆体験をお話いただいた笹口さん、浅野さん、小畑さん、田淵さん、塚本さん、新出さん、山本さん。また、被爆体験談語りから慰霊碑等巡りなど広島派遣において多大なるご協力をいただきました中澤さん、一緒になって平和について考える機会をいただきました広島女学院中学高等学校の皆さん。そして、青梅市・羽村市の中学生の活動を指導し、サポートしていただいた福田先生、岩崎先生、大学生リーダーの皆さんやワークショップのファシリテーターを務めていただいた浦山さんなど、ご協力いただきましたすべての方々に心より感謝申し上げます。

青梅・羽村子ども体験塾実行委員会 事務局一同

**青梅・羽村ピースメッセンジャーレポート2017**  
**～ヒロシマを訪問して考えた戦争の悲惨さと平和の大切さ～**

発行日 平成30年2月  
発行 青梅・羽村子ども体験塾  
編集 青梅・羽村子ども体験塾実行委員会  
事務局 【青梅市事務局】  
青梅市企画部秘書広報課広聴・国際交流担当  
〒198-8701 東京都青梅市東青梅 1-11-1  
0428-22-1111（代表）  
div0110@city.ome.tokyo.jp  
【羽村市事務局】  
羽村市企画総務部企画政策課企画政策担当  
〒205-8601 東京都羽村市緑ヶ丘 5-2-1  
042-555-1111（代表）  
s101000@city.hamura.tokyo.jp







青梅・羽村  
ピースメッセンジャー  
レポート2017

みしが水取て下り  
せ 道ちほ  
集るけせめら



印刷用の紙にリサイクルできます